

野鳥お勉強会特別企画講演会

北海道の希少鳥類を考える集い

—夏鳥を減らさないために—

報告書



平成 28 年 3 月

野鳥お勉強会

はじめに

北海道で見られる鳥類の中には、日本では北海道以外の地域で、なかなかその姿を見る事が出来ない種類があります。その一つに近年希少種となったシマアオジがあげられます。シマアオジは、元々北海道に広く分布する鳥で、1990年代までは札幌周辺でも普通に観察することの出来る鳥でした。しかし、その頃を境に世界中で急速な個体数減少が始まり、今では道内でも確実な生息地と言える場所は、わずかに片方の手の指の数ほどになってしまいました。

希少鳥類を保護するには早い段階からの取り組みが欠かせませんが、このシマアオジの近年の詳しい生息情報も少ないなかにおいては、保護への糸口がつかめない状況ともいえます。

今回のシンポジウムでは、早くからこのシマアオジの減った理由を中国などに渡り調べられた自然研究家で作家の遠藤公男さんを講師にお招きし講演をいただきます。また、パネルディスカッションでは、昨今における希少鳥類と呼ばれている鳥たちの生息の現状や課題、保全に向けた取り組みなどについて、そして、シマアオジのように普通にいた鳥を希少鳥類にしないために、私たちはこれから自然とどのように接していかなければならないかを、道内外の研究者やナチュラリスト、動物写真家らと共に考える道民参加型の交流会を企画するものです。

私ども野鳥お勉強会は、3年前には、第300回開催記念の事業が行われ、来年度が30年の節目の年を迎えます。こうしたなか、このように講演会を行いますことは、ご協賛をいただきました北海道新聞野生生物基金様をはじめ、関係機関や団体、講師の皆様方、そして本講演会に参加くださいました多くの方々のご支援とご協力の賜であると感謝いたします。皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成28年3月

野鳥お勉強会

代表 富川 徹

目 次

はじめに

「野鳥勉強会特別企画講演会 北海道の希少鳥類を考える集いー夏鳥を減らさないためにー」 開催の概要	1
第1部 特別講演	4
1) 「シマアオジの受難」 遠藤 公男 氏 (動物文学者)	10
2) 「道央 からアカショウビンが消えた」 嶋田 忠 氏 (鳥類写真家) ..	19
第2部 講演&パネルディスカッション	30
<コーディネーター> 川路 則友 氏 (元森林総合研究所北海道支所長)	
1) 「タンチョウの群れを保つための情報 -群れの状態を捉えるため、どのように調査を行ってきたか-」 正富 宏之 氏 (専修大学北海道短期大学名誉教授)	33
2) 「シマフクロウのこと」 早矢仕 有子 氏 (札幌大学教授)	41
3) 「沈黙の春、再来?夏鳥の減少」 玉田 克巳 氏 (北海道立総合研究機構主査)	50
シンバ・チャン 氏 (パートライフ・インターナショナル東京) /ス ^ペ シャルゲスト	52
資 料 (開催資料・案内チラシ・新聞記事)	70

「野鳥お勉強会特別企画講演会 北海道の希少鳥類を考える集い -夏鳥を減らさないために- (平成 26 年 11 月 28 日)」開催の概要

「近年、シマアオジやアカショウビンは見られなくなったね！そのうち北海道では見られなくなるのだろうか！」などと、野鳥お勉強会の例会でそれらの鳥名が上がるたびに口癖のように語られます。「とにかく現状を確認して何らかの手だてを打たなければ…」と頷く中、ひよんなきっかけ？から、この講演会が企画されました。

開催は、シマアオジなどの減少に関心を持ち、中国など各地を調べ歩かれた遠藤公男さんをはじめ、道内の野鳥研究者や動物写真家、そして道外から特別ゲストを招いた講師陣の講演と会場の声を踏まえたシンポジウム形式で行われました。参加者は 85 人、会場の都合で約 20 人に申し訳なくもお断りをすることもありましたが、有名講師のお話は、どれも興味深く有意義で、参加の皆さんからも満足なお言葉をたくさんいただきました。

当会としても全国的に珍しい夏鳥の減少に関わる講演会を開催できたを大変光栄に思い、開催に関わった以上、私たちとしてこれから何ができるかを関係機関と連携し、見られなくなった夏鳥が再び普通にみられる日の来るための努力をしなければならぬと思います。

この度はご協賛をいただいた北海道新聞野生生物基金様をはじめ、関係機関や団体、講師の皆様方、そして本講演会に参加いただきました多くの方々にお礼を申し上げます。

【講演内容の概要】

●特別講演「シマアオジの受難」の遠藤公男さん（動物文学者）は、黒田長禮先生宅にコウモリを持って行ったときの、お茶菓子の最中を食わずに帰ってきたという悔やまれるお話から始まり、中国の野鳥の輸出、小鳥のグルメ祭りに至る。弁が立つユニーク話に興味が続く。

●特別講演/「道央からアカショウビンが消えた」の嶋田忠さん（鳥類写真家）は、45 年前に家の 2 階から見えたアカショウビンやヤマセミが、千歳の森をはじめ、白老、苫小牧、札幌から消えた。カショウビンやヤマセミの細かい行動やしぐさの画像は、満面笑みで語る嶋田さんのまさに洞察力と天性である。ただ、この日プロジェクターの調子が悪くアカショウビンがクロショウビンとなったことが悔やまれる。

●講演/「タンチョウの群れを保つための情報 -群れの状態を捉えるため、どのように調査を行ってきたか-」の正富 宏之さん（専修大学北海道短期大学名誉教授）は、我々人間とタンチョウとの関係について、生物保全に知識と見識を持った行政官、地道に調査を重ねその結果を解析できる研究者、生き物との共存に関心と協力を惜しまない地域住民との共同作業や合意形成などの総合力が希少種保全につながる。

●講演/「シマフクロウのこと」早矢仕有子さん（札幌大学教授）は、頭を痛めているのは、シマフクロウの写真を撮りに来る人が増えている。そのため個体に悪影響を与えないよう

厳格なルール作りが急務だが、同時に人々の関心の高さを保護へと IT 技術を活用した見守り作戦を行い侵入者から巣を守ることも可能と考えている。

●講演/「沈黙の春、再来？夏鳥の減少」玉田克巳さん（北海道立総合研究機構主査）は、シマアオジは環境省のレッドリストでは現在ランクの中では一番高いところに指定されている。しかし、タンチョウやシマフクロウのように「種の保存法」に指定されていないために、保護増殖事業計画のステップには及ばないのが問題となっている。国の政策に基づく成果に期待したい。

●講演/「中国のシマアオジ事情」シンバ・チャンさん（バードライフ・インターナショナル）は、スペシャルゲストでのご登場。シマアオジの減少は中国の密猟が大きく、日本での保全に対するアイデアを中国に伝えることが必要である。今後はロシア（特にサハリン）の協力も得ながら共同研究調査を行うことが必要である。

●パネルディスカッション/ コーディネーターの川路則友さん（元森林総合研究所北海道支所長）は、まとめると、本開催は現在のシマアオジの問題点をグローバルかつ最新の情報という内容にある。このシンポジウムを通じて日本の中でシマアオジに最も関心を示しているのは北海道民だと思う。シマアオジの保全に向けては、政府レベル、保護団体レベル、民間レベルで進めていくとともに、新しい保全策についてはまずは政府レベルで考えることが必要である。また、アジアで共通のモニタリング調査の体制づくりも必要と考える。

（北海道新聞野生生物基金実績報告書より 平成 28 年 3 月）

第1部 特別講演

『シマアオジの受難』

遠藤 公男 (動物文学者)

『道央からアカショウビンが消えた』

嶋田 忠 (鳥類写真家)



第1部 特別講演

演題

1. シマアオジの受難

遠藤 公男 氏 (動物文学者)

2. 道央からアカショウビンが消えた

嶋田 忠 氏 (鳥類写真家)

松山：お待たせいたしました。

これより「北海道の希少鳥類を考える集い～夏鳥を減らさないために～」を開会いたします。私は司会の「野鳥お勉強会」事務局の松山と申します。よろしくお願いいたします。

まず最初に皆さまにお知らせとお願いがあります。本講演は公益財団法人北海道新聞野生生物基金の助成を受け開催しております。野生生物基金は市民や有志の募金で活動しており、志がございましたら受付にモーリーの募金箱がありますので、ご協力をお願いいたします。なお、本開催では野生生物基金へ



の報告書のため当会の担当者が録音や撮影を行っておりますので、ご理解くださいますようお願いいたします。また、会場での写真撮影等は著作権・肖像権保護のためご遠慮いただいておりますので、こちらも併せてご理解、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

この会場は札幌学院大学のサテライトになっています。本日4階では講義が行われていますので、休憩時間等もお静かにお願いいたします。トイレは2F、3F、4Fにあります。また、ゴミについてはお持ち帰りにご協力いただいております。

それでは、まず初めに当会代表の富川からご挨拶を申し上げます。

富川：野鳥お勉強会の富川です。

本日は、野鳥お勉強会特別企画講演会の開催におきまして、このように大勢の皆さまのご参加、並びに遠方からの多数のお越しをいただきましたこと、誠にありがとうございます。野鳥お勉強会は、昭和62年（1987年）にスタートした会で、ちょうど来年が30年の節目の年となります。今回の開催は、



その30周年のプレ開催ともなり、その意味でも大いに盛り上げられればと願っています。3年前には、第300回開催記念の事業が行われました。また、このように北海道新聞野生生物基金様のご協賛をはじめ、関係機関や団体など多くの方々からのご支援とご協力により、講演会を行えますこと、あらためて嬉しく思います。この場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

さて、この講演会は、希少鳥類をテーマに、とくにシマアオジとアカショウビンの話題が主体となっています。皆さんは、シマアオジ、アカショウビンを最近は見ることがありますでしょうか。詳しいお話は、後ほどの講演会の中でお聞きすることになりますが、極めて少なくなっているのが現状なのです。私たちの例会の中でも、こうした話題になると、「黙っていたらそれら夏鳥は北海道で見られなくなるのだろうか」、と語るたびに、心配と寂しさがこみ上げてきます。本日はそれらを考えるうえで、大変に心強い講師をたくさんお迎えしております。ここでは、今でも希少種で北海道を代表するタンチョウやシマフクロウの生息の現状や課題にも触れながら、「普通に見られる鳥たちが、希少鳥類にならないために、私たちはどのように野鳥や自然と関わっていかねばならないか」を、講師の皆さん、そして会場の皆さんと一緒に考えたいと思います。本日は、活発なお話、ご意見などが多々得られますことを願いまして、簡単ではございますが、開会の挨拶といたします。

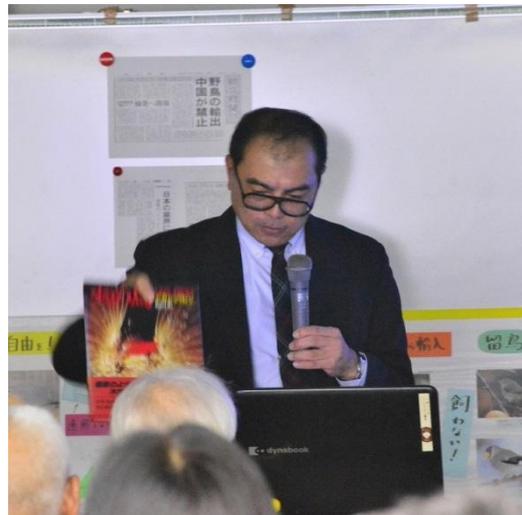
松山：どうもありがとうございました。

それでは特別講演の前に今回の講演会の内容をより理解していただくために、現在の北海道の希少鳥類の個体数の増減や個体数の変貌など、置かれている現況などを「希少鳥類の最近の状況」というタイトルで玉田克巳さんにご報告させていただきます。

玉田さんは静岡県浜松市出身で帯広畜産大学の卒業論文、修士論文でクマガイやカラスの研究に従事し、その後中標津町の高校の事務職員、根室支庁林務課を経て、1997年から北海道環境科学研究センターに所属され、2003年から札幌へ異動となりました。現在では北海道立総合研究機構の主査をされている研究者です。研究はするが行動が伴わない研究者がいますが、玉田さんは北海道のシマアオジの絶滅危惧のランクを孤軍奮闘で一気にあげられた行動派の研究者で、私は個人的に尊敬しております。それではよろしく願いいたします。

玉田：玉田です。過分な紹介で驚いています。

私は遠藤公男さんの「夏鳥たちの歌は、今」という書籍を読ませていただき、非常に感銘を受けました。この書籍は夏鳥の研究者の大部分が引用しています。その遠藤さんには第1部の最初にシマアオジのお話をいただきます。その後に嶋田さんが「道央からアカショウビンが消えた」と題してお話しいただきますが、嶋田さんのお話は今更紹介する必要もありません。



私は高校時代に嶋田さんのカワセミの写真集を肌身離さず持っていました。私が学生時代にアカショウビンの写真集を2冊出版されています。この辺のお話も聞けるのではないかと思います、今日は楽しみにしています。

シマアオジに関しては今日ご参加の皆さんに改めて紹介する必要はありませんが、このような鳥です。顔が黒くて、頭が茶色で黄色が目立つ鳥です。声を流します。図鑑などには草原で涼しげに鳴くと書かれています。「チーチーチー

ヒヨヒヨヒヨ」と鳴きますが、私には「冷蔵庫冷え冷え」と聞こえます。メスはオスと違い顔は黒くありません。お腹が鮮やかな黄色なのはメスも同じです。日本の中でも昔から北海道にしかいません。この図のように今でもこの範囲内にいるかは分かりません。記録としては青森県や秋田県で繁殖したというのがしっかりと野鳥誌に記載されています。遠藤さんの書籍は夏鳥を読み解くバイブルです。この書籍は1993年に出版されています。少し読み上げますが、「利尻島から西表島までの102人の緊急レポート」として全国から寄稿形式で書籍が編集されています。北海道は10人の方が寄稿されています。例えば野幌のクマガラは本日の司会の松山さんが紹介されていますし、野幌森林公園のエゾライチョウはこの会の立ち上げ際にお世話になった柳沢先生が寄稿されています。このようにいろいろな方が関わっています。ただこの10人の方のレポートの中にシマアオジは入ってきません。ということはこの書籍が発売された1993年頃にはシマアオジが減ってはいなかったというひとつの事実ではないかと私は考えています。よくシマアオジは1990年代前半にいなくなってきたと言われていますが、この書籍から読み解けるのもひとつの事実ではないでしょうか。

実際の分布がどのように変遷しているかという資料はなかなかありませんが、環境省が進めている自然環境保全基礎調査の中で1974～1978年に全国をこのようなメッシュに区切って調査員を配置して歩いてもらい調査をしました。昔はこれほど分布情報がありました。1997年～2002年にかけての調査ではこの図ほどまでに減っています。地点数だけで言いますと52地点が15地点に減って、29%になっていて、70%ほど減っていることが分かります。

日本野鳥の会の14支部や野鳥愛護会が探鳥会を行っていますが、探鳥会というのは森林をターゲットにすることが多く、草原で継続的に探鳥会を行っている場合は少ないです。それでも7か所くらいあり、ここではそこにシマアオジがいたか、いないかを示しています。棒線では探鳥会は行われていませんが、○印は行われていて、シマアオジがいたことを示しています。×印は探鳥会が行われていたが、シマアオジがいなかったことを示しています。札幌の米里あたりでは×も多くありますが、○もポツポツとあります。しかし1994年辺

りからあまり見られなくなってきました。あるいは帯広畜産大学の農場やワッカ原生花園では1990年代後半までは見られましたが、その後見られなくなりました。十勝地方の池田町キモントウ沼では、昔のデータはありませんでしたが、シマアオジが少なくなって、あえてこの場所で探鳥会を行うようになって2011年から見られなくなったという調査結果です。野鳥の会の十勝支部の方々にその後の状況も聞いていますが、見られていないのでこの辺ではいなくなったのでしょうか。1990年代前から減少が始まり、現在ではほとんど見られなくなってしまったということになります。それから探鳥会とは別に今日もいらっしやっていますが鎌田さんなどが見えていて標津湿原では2005年前後から見られなくなったという情報もあります。このように2000年以降も減っているというのが分かります。

簡単に図で説明します。これは先ほどの2つの図のうちの新しい方の図で2000年前後はこれほどの情報がありました。例えば野付半島は2003年にいなくなりました。根室地方は野鳥の会根室支部の方たちに情報をもらっていますが、最近の情報はありません。ワッカ原生花園では1998年から情報がありません。今日、大館さんが来てくれているのもっと正確な情報が分かると思いますが、コムケ湖は2007年から情報がありません。シブノツナイ湖でも最近情報がありません。野鳥の会オホーツク支部の方に聞いても最近情報は情報がないということです。釧路湿原、温根内も最近情報は情報がありません。十勝の池田のキモントウ沼では2011年から確認していません。浦幌など十勝地方も野鳥の会十勝支部からの情報で確認できません。江別を含めた石狩管内もない、静狩湿原も最近の情報がありません。稚内のメグマ沼も最近情報がありません。ウトナイ湖も2012年からいなくなりました。留萌はしっかりとした情報はありますが、「いる」という情報がないので、おそらくいないのではないのでしょうか。このように北海道からほとんど消滅してしまっている状況です。希少種ですので、あえてここではどこに生息しているかは明かしません、絶滅してしまったかといわれるとそうではありません。私が確実に押さえている場所は北海道で一カ所だけです。さらに確認はとれていませんが、いるらしいという情報はポツ

ポツとありますので、今後調査していかなければなりません、本当に片手に満たないほどしか確認できないというのが現在の状況です。

一方、アカショウビンですが、後程きれいな写真が出てくると思いますので写真は出しません。アカショウビンは基本的に北海道の東部では少なく、北海道西部の鳥と言われてきました。しかしこの図のように30地点あったものが、最近では16地点までの約半分まで減少しています。これがさらに2000年以降この図の地点からいなくなっていると思います。今日はその辺のお話も聞けるのではないかと考えています。

調査を行った場所だけで、全道の生息地点という訳ではありませんが、アカモズも以前は40地点ありましたが、今は9地点の23%になっています。

このようにシマアオジ、アカショウビン、アカモズなどはかなり深刻な状況ではないかというのが調査や活字の情報から分かってきています。

このようなことから今日は第1部のお話を聞けるといいのではないのでしょうか。

松山：

どうもありがとうございました。

具体的な情報で分かりやすかったです。(写真撮影についての再案内あり)

それでは特別講演に入ります。最初は遠藤公男さんによる「シマアオジの受難」という演題でお話していただきます。

遠藤さんは岩手県一関市出身で小学校の先生をされながらコウモリの新種を3種も発見されています。その他、野鳥の密猟や買取問題をライフワークにしながら、著書に「原生林のコウモリ」、「韓国のトラはなぜ消えたか」、「野鳥売買メジロたちの悲劇」、「帰らぬオオワシ」、「ツグミたちの荒野」、「イヌワシと少年」など多数発行されています。我々の大先輩になり、日本野鳥の会の元宮古支部長もされていました。今日は岩手県からいらしていただきました。それでは遠藤さんよろしく願いいたします。

遠藤：お招きいただき、本当に恐縮しております。



浅学非才の身という、そのままでありまして、少し前までは青二才と思っておりましたが、すでに80歳を超えました。こんな年になってしまったのか、と本当に驚きます。

私は小学校の代用教員をしながらコウモリを調べてきました。20代の初めの頃でしたが、子供が持ってきたコウモリがアブラコウモリのようにだけそうではありませんでした。奥羽山系の山奥だった

のですが、原生林から出てきて、人家には入りません。そこでそのコウモリを調べようと思い、哺乳動物学会の会長・黒田長禮先生のところへ恐る恐る持っていきました。「このコウモリは原生林から出てきて、人家には入らないのですが、アブラコウモリでしょうか？」とお聞きしました。和服を着た耳の大きな黒田先生は応接間にスリッパを出して招き入れてくれました。

今思えば記念すべきご指導をいただいたと思っております。お手伝いさんが目の前のテーブルにお茶と最中を出してくれました。先生は私の持ってきたコウモリの標本をルーペで見せておられました。ここで思ったのですが、都会の人はお菓子などを出す時は「どうぞ」と一回しか言わないのですね。私は田舎で育ったので、母親から「どうぞ、どうぞ、どうぞと3回言われたら一つとる、両方の手でとったりするんでない」と厳しくしつけられていましたので、「もう一回、どうぞと言ってくれないか、最中食いたいな…」と考えていました。そうしている内に黒田先生は「耳の形などから普通のアブラコウモリです」とおっしゃられました。珍しいと思って持っていきましたので、非常にがっかりしました。それにととうその最中を食べずに帰ってきてしまいました。丸くもなく四角くでもないどっしりとした立派な最中でした。それ以来お店に行くと黒田藩の殿様だった黒田先生の自宅で出された最中を食べたかったと思い出す

ようになりました。黒田先生のご自宅を出た後、私はその足で国立科学博物館へ行きました。国立科学博物館にはイリオモテヤマネコの分類で有名だった今泉吉典先生がいらっしゃいました。まだ40代の頃の今泉先生が「色が黒いな、こんなに黒かったかな。調べてあげるから置いていきなさい。」とおっしゃって下さいました。それで喜んで帰ってきました。

雪が降る頃になって「頭骨や歯の形はアブラコウモリと同じだったが、今後このような研究を続けていきなさい」というお手紙が来ました。またまたがっかりしました。どういう訳で山から出てくるのか？下の方の部落に降りていくとそのコウモリはいません。色々個人的に調べていく内にアブラコウモリは生殖器の骨が長く、S字状に曲がっているんですね。あちこちから標本を手に入れて比べてみるのですが、みんな乾燥していて生殖器の骨を取り出すのが難しいのです。その内に海岸線の町で普通のアブラコウモリを網で捕獲することが出来ました。比べてみると山の方のコウモリは生殖器がストレートで普通のアブラコウモリはS字になっていました。初めての発見となり私の遠藤という名前がついて「エンドーイ (endoi)」となりました。それで味を占めてこのコウモリの地理学的研究を始めました。特に山の中の学校ばかりを選んで、岩手県内で新種のコウモリを3種類発見しました。そこで国立科学博物館が私を研究員にするという辞令を下さいました。あの頃の国立科学博物館は山の中の教員にそのようなことをしてくれました。それでおだてられて北海道のペテガリ岳の高いところで全然違う尻尾の少し長いヤチネズミを捕まえました。それを持ち帰り普通のヤチネズミとは違うと思い標本にして国立科学博物館に送りました。結果はムクゲネズミの仲間となり「ミヤマムクゲネズミ」ということになりました。これは今泉先生が発表したのですが、北大の阿部先生は普通のムクゲネズミだということでは対立しています。図鑑の中では「これはミヤマムクゲネズミだという説もある」という風になっています。研究者が少ないからでしょうが、もう少ししっかりと研究すれば判明するのだと思います。

当時はイリオモテヤマネコなど哺乳類の新種が10種類ほど発見されましたが、その内の4種類は私が発見しました。だから四割打者だったですね、驚きます。

私の領分は岩手県の北上高地や遠野物語などがあつた早池峰山などが私の縄張りなのですが、田中角栄さん関係の岩手県知事が北上山地総合開発を打ち出しました。私はコウモリがいなくなるからというより貴重な原生の自然が失われると公然と反対しました。それでなくともカッコウやヨタカなどの野鳥たちが減っているので、新聞やテレビ、投書などで反対活動したもので県庁は私を目の敵にして県知事が命令した訳ではないと思いますが、私にコウモリの採集許可を出させなくさせました。意地悪なことに驚きました。採集しなければ調べることができません。半ばあきらめかけていると学研から私の半生の自伝を書いて欲しいという依頼がありました。私は冬休みの間に書き上げ、小学校の国語の先生に見てもらいました。てにをはを直して欲しかったのですが、「字が下手で直しようがない」と言われてしまいました。しかし、出版すると第19回青少年読書感想文コンクールの中学生部門の一冊になり、文学性が高いと言われました。そこで私はコウモリの研究は止めて別のものを書くことにしました。

当時、三陸海岸に生涯で1000羽以上もワシを撃ったという鉄砲撃ちがいました。この方は訪ねる度にすごい伝承技術を持っているんですね。遠野物語の現在をつなぐような人物でした。それで41歳の時に教員を止めようと決心しました。私と妻は同じ教員で共働きでした。妻に言いました。「おれはこれから、今までの日本の動物文学の教科書のでたらめなことやありもしないことを徹底的に別なものにして書く」というと、妻は「書いてください。後のことは私がみます」とはなりませんでした…。小学校の子供が3人もいるのにどうやって暮らすのか、と言われ大変でした。しかし止めました。当時私は海岸線で日本野鳥の会宮古支部長をしていました。本部の評議員や理事になり、本部の会議に出るようになりました。野鳥の会に所属していて一番癪なのは、海岸線の港町というのは鳥を籠に入れて鳴かせるというのがとても好きなんですね。船員というのは海から陸に上がると鳥を獲って籠に入れて飼うということが趣味だったんです。釜石、宮古、八戸などの船員はみんな野鳥気遣いでした。小鳥を大事にしたり、巣箱をかけるなどの愛鳥週間などの運動はありましたが、学校の前の道や街中では「ピーヒャラピーヒャラ」とコマドリやオオルリ、ウグイス

が売られていて、町を歩いていたほうが鳥の鳴き声が聞こえるというのが癪でした。売っている店を見ると証明書があり、全て輸入した鳥だと書いてあります。中国から入ってきたと証明書には書かれていますが、これは密猟したものがどんどん入ってきているんです。一番多いのはウグイス、メジロです。

北海道の人たちはともかく、内地の人たちはさんざんたる状態でした。それで、野鳥の会の役員たちは小鳥屋の前では目を伏せて歩くといった、どうにもならない状況でありました。私は本部に行って鳥たちは中国から輸入となっているが、一度中国の状態がどうかを調べではどうかと言いました。全然データがないものだから反対もできないのです。野鳥の会の本部からは「旅費は出してもいいのであなたが行ったらどうか」と言われました。そうしてもらえたのですが、妻からは「中国まで行って鳥をどうやって調査をするのか」と言われるままに、その通りで、1、2年分の旅費が出るわけではなく、10日程度の旅費しか出ませんでした。そこでまずは香港に入りました。香港には金や銀など金持ちが集まるネイザン・ストリートの裏にバード・ストリートという細い160mほどの通りがありました。セキセイインコなどの飼い鳥が売られていたら仕方がないと思いながら訪れました。

行ってみると、もう凄まじい。一番多いのはメジロで餌付けしながらたくさんの鳥が売られていてペットショップ状態です。中国の人たちは日本人以上に野鳥気違いでした。一番すごかったのはガビチョウがクロツグミに似たような



すごく大きな鳴き声で鳴いていました。このガビチョウは世界一声のいい鳥と言われていています。丸い籠に袋をかけて売っていました。中国ではヒナから捕ったり、網で捕ったりと野鳥の保護活動からは程遠い状況でした。実は香港の前に野鳥の会の調査ではありませんでしたが、上海に入りました。朝早くから地元男性たちが大勢で籠に入れた鳥を持ち歩き、散歩かたがた鳴かせることを

楽しませたりしていました。さらに北京から北側では草原に生息するコウテンシというヒバリの仲間でガビチョウと双壁をなす凄まじい鳴き声を持った鳥も人気でした。中国の状況を調べている内に香港から輸出される鳥たちは広州から入っていることが分かりました。

そこで広州にも行かなければ分からないということで調べました。当初は香港の業者は香港で捕獲したメジロに卵を産ませ、孵化させ餌付けして輸出しているということでしたが、広州ではもっと進んでいると言っていました。実際に行ってみたら卵どころか、密猟、広州では罟をかけたリ、巣から直接メジロを捕獲して香港へ送り、日本へ輸出していたわけです。中国のメジロはヒメメジロと言って日本のメジロより一回り小さく鳴き声も細く貧弱なため、輸入商はヒメメジロを捨ててメジロだけを日本へ輸出していました。日本で売られているメジロは安いものでも5,000円でした。私が日本のペットショップで鳥かごのメジロを見ていると「お客さん、鳥が怖がっているのでじろじろ見ないでください」と業者は嫌がりました。中国から輸入したメジロ（ヒメメジロ）はさらに安く1羽5~600円ほどで籠の中に10羽ほど入れられており、日本のメジロと抱き合わせて販売されていました。

これは千葉県でつけられた番付表です。3分間に何回鳴くかでつけられています。一番よく鳴くものが横綱、そして大関、小結という風に付けました。横綱にもなると下手をすると乗用車一台分くらいの値段が付けられます。このような取引が関東から西側に広まっていました。私は環境省に取締りをしてはどうかと提案しました。しかし、「マージャンでも賭けているかは分からないし禁止するわけにはいかない」と同じで、鳥の鳴き合わせを楽しんでいるだけで取り締まるというのは無理があるという回答でした。佐賀県では公園で運動会みたいな勢いで230人ほど集まり、ひとり10羽ほどのメジロを持ってきて鳴き合わせ大会が、優勝者が出るまで朝から晩まで一日中ひたすら鳴き続けさせていました。これは鳥獣保護法に反するのではないかと問い合わせてもそれが本当に密猟された鳥だとは分からないという回答で、取り締まってくれないことに苦労しました。「何のためにこんなことをしなければならないか」と…。裁判

沙汰にもなりました。検察側からは、密猟などは特殊犯罪で、人間に被害がない犯罪は微罪だということで証人が必要。これは立小便をしているのを取り締まれないのとやや同じだと警察からも言われたことがあります。「被害がないのだから、いいんじゃないですか！」という感じです。その後は保護側の意見が度々新聞などに掲載されるようになり、次第に愛玩使用を禁止する流れになっていきました。

いよいよシマアオジの話になりますが、私が中国広州を訪れている間にシマアオジが数万羽も捕獲され食べられているという情報が入りました。そこは三水という広州からできたばかりの高速道路で45分ほどの場所でした。通訳に確認したところ、明日は香港の大きなツアーを案内しなければならず、今日ならいけるということで早速訪れました。1998年夏に訪れたのですが、私が訪れた時はすでに禁止になっていました。それでも状況だけでも調査しようと思いました。大きな川の堤防沿い150mほど路地があり、そこに屋台付の車がびっしりと並び、大勢の人たちが食べたという話でした。家族で来るものあり、酒を飲むものありで、盛大にやっていたという。本当にシマアオジだったのかと図鑑を出して確認しましたが、間違いないことが分かりました。一番多く食べられるのはシマアオジでその次は日本に渡ってくることはほとんどありませんが、シマノジコ、そして他にミヤマホオジロも食べられるということで何人かに聞くとこれら3種類でした。また、近くの食堂に入り、おかみさんにも食事しながら聞いたら、禁止になって路地沿いでは販売されなくなったが10月の稲穂のシーズンになれば大量に捕れるので、店の中では少々は食べられると笑って話していました。

どのように捕獲するのかと申しますと、報告書にもあるとおりロシアや中国の奥地で繁殖したものがシーズンには海岸線に沿って南下してきます。そして夕方になると稲穂を食べに大群で旋回して稲穂に降りる。その飛来するところを袋網（カスミ網のようなもの）を張って追い込むように捕るようです。1回に1000～3000羽も獲れるので生きたまま持ち込みます。それで店ではどうやって食べるのかと聞くと、いろいろあるが最近はやりだしたのは鳥を生きたまま粘

土で包み、蒸しあげて食べるのが、とてもおいしくなるということでした。中国人の食文化というか欲をまざまざと見せつけられました。羽のあるものは飛行機以外は何でも食べるという国民性には、それを禁止にするということとはなかなか難しいことです。日本の環境省に当たる中国の林業局に行って保護関係の人たちに中国の様子を聞きましたら、なんと中国側は日本にかなり輸出していることは初耳だという。中国人で、日本の京都大学に留学し学位を取得し、現在では日本人の奥さんと帰化して日本に暮らしている方がいて、その方と計3回中国に行きましたが、この方は中国の林業局に非常に顔の利く人でした。この方のお陰でどこへ行っても歓迎されて、色々と調査ができたわけです。20年以上前から中国でも愛鳥週間を決めて大きな集まりを公的に開いています。

日本では全く中国のそのような状況は伝わっていません。野鳥を食べないという署名を集めたり、啓発のポスターなども集まりでは行っていますが、禁止にすることは非常に難しいことでした。しかし中国の林業局はついに野鳥の輸出を全面的に禁止しました。2000年12月29日付の朝日新聞のトップ面に日本野鳥の会の名前が入った前代未聞のことでした。しかし全面的にすぐに禁止になったかというところではありません。23ある省の中ですでに許可証を出してしまったところはその許可が切れるまでは問題ないということでした。3年前に上海を訪れましたが、ここでもたくさんの野鳥がいまだに売られていました。禁止にしてしまうとこれを糧に生活している人たちが困るので、まだ行っているという言い訳をしていました。しかし鳥インフルエンザで中国にもたくさんの死者を出したことで、今では大きく保護側に傾いてきています。

台湾でも鳥かごを持って地下鉄に乗ることが出来なくなりました。今まで野鳥を飼って遊んでいた人たちが世論や家族の反対などで飼うような環境ではなくなってきました。しかし先ほどの三水に行ってもまだ捕獲する光景を見ることができのではないのでしょうか。頼めば捕獲している村などが分かる可能性は十分にあります。私の年齢では現地に入って調査するのは難しくなってきましたので、出来れば若い人たちが何人かのグループで現地に入ってもらい調査を継続してほしいと思っています。

この写真は先ほどお話した 230 人が集まった長崎県諫早市の鳴き合わせ大会です。本当に驚きました。なんと公民館を貸し切って行われているんです。この大会については日本野鳥の会の本部にも相当圧力をかけてもらいました。本部では私のように野鳥が減っているということを声高に言えば会員が減ると言っていました。野鳥が減っているのに会員の心配をしてどうするんだと対立もしました。カスミ網で焼鳥用の鳥を獲ることも中部六県で非常に蔓延していました。これはもちろん食べるわけですが、「ツグミたちの荒野」という拙著で相当な打撃を与えることが出来ました。暴力団が捕獲をしているのですが、裁判では証人にも立ちました。暴力団の業者は執行猶予付ですが、有罪になりました。少しずつ流れが変わってきました。

シマアオジがテーマですが、私はここまでしか調査が出来なかったことをお詫びいたします。これで報告を終わりにいたします。どうもありがとうございました。

松山：どうもありがとうございました。

この後、第 2 部では中国のシマアオジに関する最新情報の報告もしていただけるということですので、それと合わせてお聞きいただくと、全体的な現状が今日ある程度ご理解いただけると思います。

次は嶋田忠さんの特別講演になります。なお、本日後ろの方で嶋田さんの最新の写真集、と嶋田さんのアカショウビンの記事写真が載っているモーリーの今月号が販売されています。またウォッチングガイドもおいてありますので、ご希望の方は是非どうぞ。(10 分休憩)

松山：続きまして、特別講演のお二人目、嶋田忠さんによる「道央からアカショウビンが消えた」をお話しいたします。知らない方はいらっしやらないと思いますが、嶋田忠さんのご説明をさせていただきます。埼玉県出身。日本大学農獣医学部卒業後、動物雑誌「アニマ」の創刊に参加されました。以後、野鳥を中心に独自の世界を開拓されました。現在は千歳市在住です。2014 年 12 月

に千歳川河畔の蘭越地区に常設展示のギャラリーを開館されました。作品に「カワセミ清流に翔ぶ」「火の鳥アカショウビン」など多数出版されています。本日ご参加の皆さんにはNHK やテレビ朝日のニュースステーション（現報道ステーション）などを通じてご存知の方も多いかと思います。このような業績に対して「アメリカ国際フィルムフェスティバル自然部門」で最優秀賞を受賞なされています。

旭山動物園をご存知だと思います。檻の中の陳列した展示ではなく、動物の生き生きとした姿を見せる行動展示を行い、日本中の動物園の展示を180度一変させた動物園です。嶋田さんは野鳥写真を通じて同じようなことを何十年前に行っていたのではないのでしょうか。野生の生き生きとした瞬間を見事に切り取って、野生の生命力を私たちに見せてくれています。いつも嶋田さんの写真集を見る度にドキドキさせてくれています。入り口にあるヤマセミの「凍る嘴」が最新刊になります。表紙にはヤマセミの嘴についた水がつららのように凍っている写真があり、見る者の背筋をゾクゾクさせます。さらに今後ゴクラクチョウの写真集なども計画されているとのこと楽しみです。

今日は道央のアカショウビンのお話をさせていただきます。それではよろしくお願いたします。

嶋田：遠藤先生のお話が面白すぎて、今日話してくることをある程度まとめて来たのですが、ほとんど忘れてしまいました。

僕は35年前の30歳の時に千歳に引っ越してきました。今日は来ていませんが、千歳に引っ越してくるきっかけになったのはエコ・ネットワークの小川巖さんでした。実は小川さんはモズ



の研究者なのですが、アニマが創刊された年に24歳の時に引合されました。静岡大学をフィールドにしているおもしろいモズの研究者がいるので、モズの写真を撮ってくれないか、と言われました。僕はモズが大好きだったのですぐ引き受けました。その時にお会いしたのが小川さんでした。当時は小川さんも28歳でした。皆さんもご存知でしょうけど、今とほとんど変わっていませんでした。小川さんは年をとらないで、僕が小川さんに最近並んでしまいました。そのような縁があり、小川さんと知り合いました。

僕は当時、埼玉でカワセミの撮影に没頭していました。カワセミの次はアカショウビンを撮影したいと小川さんに言いました。すると小川さんは「北海道にウジャウジャいるぞ！」と言いました。本来は沖縄などの南の方が多いので疑問に思いましたが、僕は昔から雪の降る場所に住みたいという夢を持っていたので、小川さんの話もあったので北海道に住むことを決めました。25歳くらいから毎年、北海道に来ました。当時、小川さんは独身で酒井亭という一軒家に何人も下宿しているところの寮長の様なことをしてしまして、毎年酒井亭に居候していました。小川さんがアカショウビンがうじゃうじゃいると言っていたのは札幌周辺だったのでフェリーで車を持ってきてあちこち探し回りました。ウジャウジャとまではいきませんでした。かなり多くアカショウビンがいました。しかしそういった場所には観察したり、撮影したりする人たちが既にたくさんいました。私はどちらかという人がいないところが好きでした。さらに人がいなくて、狙った野鳥がいる場所を探し出すことも好きでした。どこに行っても人がいるので弱りました。酒井亭で居候していた都合もありましたが、いつも苫小牧までフェリーで来て、車で札幌まで来てウロウロしていました。ある時、苫小牧からフェリーに乗るまで時間があったので、千歳から支笏湖方面へ右折しました。かなり北海道には来ていますが、初めてでした。サケマス孵化場のあたりまで行ったのですが、素晴らしい環境でした。こんな素晴らしいところは見たことがありませんでした。川があり、原生林の森があり、カワセミやヤマセミもいて、アカショウビンを合わせて3種類が生息している場所は今までにありませんでした。千歳には野鳥の会もありませんでしたし、観察

している人たちもあまりいなかったようです。そこがよくて翌年には引っ越してきましたが、千歳は本当に素晴らしいところでした。千歳で7年間、夢中になってアカショウビンの撮影をして2冊の写真集を出しました。今日は専門家も来ていますが、その後でシマフクロウの撮影をしました。当時は誰も知らない場所がありましたので、そこで撮影しました。今でも誰も知らないシマフクロウの生息場所を知っていますが、誰にも教えません。知らないことはいいことです。人に教えると、国に伝わり、国が知ると全員に広まってしまいます。今日来ている早矢仕さんには教えてもいいかな（笑）。つながりが深いから教えない方がいいかも知れません。このようにアカショウビンの撮影をしていました。

1992年から久米宏さんがキャスターを勤めていたニュースステーションに僕のコーナーが出来、1年の半分以上をジャングルで生活することになりました。残りの半分は日本で部屋の中で編集作業をしていました。いわばプロデューサー、ディレクター、撮影、出演、ナレーションまですべてをこなしていましたので、日本にいる時は外に出るヒマがありませんでした。4月～7月はほとんど海外に撮影に出ていたのですが、アカショウビンの動向が分からなくなりましたが、20年ほど前から友人たちからアカショウビンをほとんど見なくなったと聞くようになりました。2000年にニュースステーションが終わり、NHKの撮影をするようになって初めてアカショウビンがいなくなったことに気が付きました。白老のポロト湖周辺なども行きましたが、15年前には道央圏にいたところは、100%いなくなったと思います。参加者の中でこの頃に野幌辺りから白老にかけてアカショウビンを見たという人はいますか？もともと簡単に見られる鳥ではありませんでしたが、南から渡ってきた当初はかなり鳴きます。アカショウビンの声は「キョロロロー」ときれいに鳴くので、すぐに分かるはずですが。たまにカケスが見事に鳴き真似をしたことを聞いたこともあります。この時期にアカショウビンを見た人はほとんどいませんね。僕は札幌の方にはあまり来ませんでしたが、大半は千歳周辺、それに苫小牧の北大研究林や白老のポロト湖周辺を見ていましたが、ここ20年まさしくアカショウビンが「消え」ました。

たまに5月20日前後が多いのですが、声だけを聞くことが時々ありましたが、6月に入ると聞かれることはなくなりました。これは渡りの途中に立ち寄っているのではないのでしょうか。本当は6月に一番鳴きますが、繁殖期になっても全く聞こえませんでした。道央以外に行っている個体が立ち寄っていると考えるのが自然です。鳴くのも朝の3時~6時くらいの日の出の後くらいと夕方に一番よく鳴きますが、そういった時間帯に森の中に入りますが、いませんでした。道内でも函館など今でも来ているところはあるそうです。おそらく自分の生まれた場所に戻ってくるのだと思います。僕は他の場所よりもずっと千歳の環境は素晴らしいと思うので、「僕のところに来い」と言っていますが、全く来てくれません。

先ほどのお話を聞いていると中国の方だと網をかけてとっているようですね。アカショウビンは群れでは動きませんので、それはないかも知れませんが。地域に偏っていなくなるというのは絶対におかしいですね。一番考えられるのは渡来先でこの道央地区のアカショウビンが生息していた場所が「無くなって」しまったということです。「無くなった」場所はどこかと言いますと、タイ、カンボジア、ベトナムのマングローブではないかとふんでいます。私は20年来前述した地域のジャングルに撮影で訪れますが、ジャングルの中でアカショウビンを見ることは稀です。日本では僕らはよく見つけていましたが、アカショウビンは東南アジアのジャングルではなかなか見つけられない鳥です。彼の地の野鳥関係の友人に話を聞くと、繁殖は確かにしているが数は極少ないと言います。それがマングローブに行くと見る事が多くなると言います。僕も声だけは聞いたことがあります。私が考えるのはジャングルの中だと土着のアカショウビンが繁殖をしています。そんなところに日本で繁殖したアカショウビンが戻ったところで、日本で繁殖したアカショウビンはもう一度繁殖するのでしょうか？マングローブというのは生きていだけなら最高の環境です。太い木がないので繁殖はできませんが、餌は魚介類、昆虫類が豊富ですので、考えられるのはマングローブになります。そうすると合点がいくのがエビ養殖です。マングローブがどんどんブラックタイガーの養殖場に変わっていています。

僕が行き始めた20年以上前はマングローブが急速に減ることはありませんでしたが、この20年間で急速にマングローブが無くなっていっています。これはやはり中国の復興です。中国人は日本人以上にエビが好きで、大量に輸出するためにはどんどん伐採して養殖をしなければなりません。空から見るとほとんどが養殖場になってマングローブが無くなっています。東南アジアはひどい状況ですが、それでも毎年、春になるとアカショウビンに来てほしいと祈っています。ここからは写真を交えてお話していきたいと思います。(以下、写真映像により語る)

これは冬の千歳川の写真です。アカショウビンの写真をお見せする前にカワセミとヤマセミの写真もお見せしたいと思います。千歳は札幌からたったの35kmほどしか離れていませんが、冬になると10度以上寒くなります。最近は海水温の上昇のせいか、苫小牧が案外暖かいですが、千歳と恵庭は冬になるとマイナス20度くらいに下がることが多々あります。マイナス20度になると、けあらしとダイヤモンドダストを見ることができます。この写真の様な光景が1月の千歳ではごく当たり前です。

前座というと怒られそうですが、まずはヤマセミからお見せします。千歳川沿いにある青葉公園の下の崖に7年ほど前までヤマセミの巣がありましたが、アライグマに襲われてしまい、なくなりました。アライグマは垂直の崖も登ることができます。それから千歳川で最下流のヤマセミの巣は道央道よりも上流になりました。ヤマセミですと5mくらいのコンクリートの壁を作って、その上の上質の土を乗せ、上手に穴を開けてやれば繁殖させることも可能です。カワセミに至っては1mほどでも可能です。今はこのような大規模にはできませんが、私に1億円ほど預けていただければ石狩川の下流にもヤマセミやカワセミの繁殖をさせることはできるのですが…(笑)。

これはヤマセミの嘴が凍っている写真です。マイナス15度以下になると下を向いた時に下に垂れてきた水滴が一瞬にして凍ります。凍ってしまうと口が開かなくなってしまうのではないかと心配されるかもしれませんが、木に打ちつけたり、頭を振ったりして氷を飛ばします。羽づくろいをしている時に何か

飛んでいると思っていて、氷を飛ばしている行為というのに気が付きませんでした。しかし10年ほど前にビデオで撮影していた際、クローズアップして氷を飛ばしている行為だということが分かりました。

この写真は一度だけ撮影できたのですが、口の内部が凍っているところです。大きな魚を飲み込んだ時に苦しくて口を開けて上を向いているのです。川で魚が少し動いたので、チラッと見た瞬間に溜まった水が凍ってしまいました。大きな魚を飲み込んだ時は消化に時間がかかるのでなかなか動きませんので、この時ばかりはこのまま口が開かなくなってしまうのではないかと心配になりました。しかしその後、枝に打ちつけて簡単に氷を飛ばしていました。写真で見ると長く感じますが、やっぱり嫌なのでしょう、時間にすると1秒もしない間に飛ばしてしまいます。

お決まりのダイビングの写真です。やはりヤマセミは大きいので迫力があります。これは魚の視点から見たヤマセミの写真です。少しペリカンのように見えて滑稽です。千歳川は水がきれいで透明度が非常に高いです。現在、千歳川ではヤマメよりもブラウントラウトが増えてきていて、50cmクラスを見たこともあります。サケの稚魚などもバクバク食べられていて、その内千歳川からヤマメがいなくなってしまうのではないか思わせるほどです。これからの季節はこのような光景が見られるかも知れません。



次に私の代名詞にもなりましたカワセミの写真です。カワセミは埼玉県で随分撮影しました。デジタルではまだ撮っていないのでこれから「デジタルカワセミ」を撮ろうと思っています。カワセミも最近では北海道で越冬する個体が増えてきました。千歳川のサケマス孵化場周辺では20年ほど前から越冬するカワセミが出てきました。世界には90種類のカワセミがありますが、僕は日本のカワセミが一番きれいだと思います。この写真は僕が23歳の時に撮影したカワセ

ミですが、いまだにこれ以上のカワセミを撮影できていないと思っています。写真家以外のアーティストに一番評価された作品ですね。写真家というのは芸術性を重視しないのか、写真家にはあまり評価されませんでした。

いよいよアカショウビンの季節がやってきました。千歳は札幌よりも寒いので10日以上遅いです。サクラとキタコブシも残っている5月中旬の写真です。この頃千歳にアカショウビンが渡ってきて、縄張り宣言をしています。この頃は比較の見やすいですね。大体5月15日前後で、札幌より遅く札幌は5月の連休頃だと思います。植物のずれも札幌と千歳では同じなので、餌となる虫の関係で千歳は札幌よりも遅くなるのではないのでしょうか。オスは初期の頃に激しく飛び回って縄張り争いをします。この写真でどこにアカショウビンがいるか分かりますか？「アカショウビンがクロショウビンになってしまっています」

赤と緑は森林の中では補色関係にあって溶け込んでしまいます。わずかな光でもあたらないと赤にはならないので、なかなかアカショウビンは見つけづらいです。但し、他のカワセミの仲間たちと違って鳴き声で居場所を教えてください。この写真はオスがメスに羽を広げて求愛（ディスプレイ）をしているところです。普段は精悍ですが、メスに小声で「キョロロロロー」と求愛しています。後はプレゼント攻勢ですね。この写真ではエゾアカガエルをプレゼントしています。この写真では分かりづらいですが、オスとメスの違いは下腹部にあります。並ぶとよく分かりますが、オスはオレンジ色が強く出ています。こちらは魚をプレゼントしている写真です。餌をプレゼントするのも求愛の時までで卵を産んでしまうと、パツパツと止めてしまいます。プレゼント攻勢と言いましたが、それはほんの初期だと考えています。求愛行動は羽を広げるなどのディスプレイで済んでいて、その後のプレゼントはお腹に卵があるメスとの「役割分担」だと考えます。ヤマセミやカワセミもそうですが、水に飛び込んで餌をとるという行為はかなり過激な行動です。卵がお腹にあるメスに代わってオスが餌をとって、メスに与えているのではないのでしょうか。最初のうちは結婚1年目ですのでオスがメスのところへ餌を持っていきますが、次第にメ

スがオスのところまで飛んで行って餌を取り上げます。甘えなど微塵も感じられないですね。

早くこういったアカショウビンの姿を見たいものです。私の持っている山小屋の周りにもたくさん穴を掘ってしまして、エゾアカガエルやエゾサンショウウオが多くいます。アカショウビンはカエルが大好きです。求愛の時期はエゾアカガエルを獲ることが多いですが、繁殖の時期になるとアマガエルが圧倒的に多くなります。こういったアカショウビンが餌を獲りやすい環境はすぐに作ることができるので、川沿いであればスコップで少し掘ってやればいいですし、バケツを置いていてもその中に卵を産むこともあります。

ダイビングをすると…、すごくきれいなんだけど…（笑）

これも獲物の視点で水底にカメラを仕掛けています。ニホンザリガニを獲っています。僕が千歳に来たころはニホンザリガニも沢山いましたが、千歳では最近ほとんど見なくなりました。この写真はヤチウグイを獲った写真です。千歳川沿いの沼地なので多くいまして、動きが鈍いので獲りやすいみたいです。これは分かりにくいハチの仲間ですね、アカショウビンは動くものなら何でも捕ります。30cmほどのヘビでも獲り、3時間ほどかけて垂らしたまま飲み込み消化していきます。これはサンショウウオを獲った写真です。これはモクズガニです。北海道にはサワガニがいませんが、本州ではサワガニを獲ります。繁殖期にはこのエゾアカガエルがほとんどになります。この写真はエゾアカガエルですが、エゾアカガエルを食べる場合は枝に叩きつけます。10分ほどかけて体中の骨をバラバラにして、最後は魚のようにしてから飲み込みます。枝に餌を叩きつける音が大きいのでこの音でアカショウビンを見つけることもよくあります。森の中から「パチッ！パチッ！」という大きな音が聞こえてきます。たっぷり食べると1時間くらい消化するまで動かずに休息していることが多いです。

アカショウビンの巣は大木の腐った場所です。僕らがナイフなんかで簡単に穴が開けれそうな木に嘴でちぎり取るようにして巣を作ります。この写真は雛です。大体2週間くらいですね。ヤマセミやカワセミと違って入口のすぐ下が

巢（四角い形の穴）になっています。大人の握りこぶし二つ分ほどのスペースがあれば何とかあります。アカゲラなんかの巣が腐食したり、キノコなどが生えた後の状態だと考えてもいいと思います。アカゲラの使った巣を1年後にアカショウビンがとなるとアカショウビンの方が骨太で角ばっているので使えないようです。これはセミを運んでいます。これはハチです。これは巣立って2日目ほどの雛です。大体抱卵が3週間くらいで、育雛が3~4週間、結構しっかりした形で巣立っていきます。これは雛に餌（魚）を与えている写真です。これは2週間ほど経った写真ですが、この頃になると自分で獲ることができるようになり、虫なら捕ります。

これはオオタカに食べられた跡です。ハイタカやオオタカに捕食されることが多いです。巣の場合はほとんどがヘビでアオダイショウにやられてしまいます。

この写真のように木漏れ日の中で赤く輝いている姿をもう一度見たいのですが…。こんなふうに、本当は赤いのですよ…（笑）。

30年ほど前に西武デパート系列の各所で写真展を開催していたのですが、開催期間中に岡本太郎さんが2週間ほど毎日来て「この写真を見ると元気が出る！」とおっしゃっていました。亡くなってしまいました、あの人は私の師匠で本当は作品を取り換えっこする予定だったのですが、僕がコロッと忘れてしまっていて…。

滅多にこういう場所には出てきませんが、たまに夕方このような場所に出てきて鳴いている場合があります。（手持ちのパソコンを持ってその映像を披露、会場からため息！）

「まあ、これでアカショウビンも許してくれるでしょう。本当は、オレ、ビジュアル系だぜ！」みたいな…（笑）

僕が撮影していたころは天国でした。僕の家は千歳市街で林東公園の近くの千歳川沿いでしたが、ヤマセミもアカショウビンも2階から見ることが出来ました。また昨年オープンしたギャラリーも庭でも見る事が出来たのですが。このギャラリーは中本ムツ子さんというアイヌの方が持っていた場所でよく料

理を食べさせてもらいながら見ていました。今もいてくれればギャラリーと併設しているカフェからコーヒーを飲みながら見ることができるんですがね。毎年待っているのですが、ダメですね。

日本でも私がカワセミの撮影を始めた45年前は一番カワセミを撮影しづらい時期でした。開発が進み、公害も起こりました。これが今のアカショウビンの状態と同じだとすると日本でも10年ぐらいしたら日本も変わってきましたね。東南アジアはどんどん発展していて50年前の日本のようです。発展していく過程で中流意識が芽生え、自然保護などの観点にも目が向くようになると日本のカワセミと同じようにアカショウビンも戻ってくるのではないのでしょうか？人間もそれほどバカではありませんので、マングローブの植林なども始まっていますので、何十年先になるか分かりませんが、日本でもやれたことなので必ずできるはずですよ。よく日本人は「日本人だからやれた」と言いますが、よく東南アジアに行く私からすれば、東南アジアの人たちの方が優れていると思います。お互いに弱点を補い合えばいい知恵もでてくると思います。

今のところ、僕らにでもできることは、「毎年穴を掘ってエゾアカガエルとアマガエルの繁殖場所を増やしていくことかな」と思っていますが、とにかく野幌でもどこでも見られるようになってほしいと願っています。どうもありがとうございました。

松山：どうもありがとうございました。

嶋田さんの撮影されたアカショウビンが表紙のモーリー、ヤマセミの写真集は後ろで販売しておりますのでどうぞお買い求めください。それでは、第2部が始まるまで15分ほど休憩いたします。なお、質問はパネルディスカッションの時間に一括して行います。

第2部 講演&パネルディスカッション

<コーディネーター> 川路 則友 (元森林総合研究所北海道支所長)

『タンチョウの群れを保つための情報』

-群れの状態を捉えるため、どのように調査を行ってきたか-

正富 宏之 (専修大学北海道短期大学名誉教授)

『シマフクロウのこと』

早矢仕 有子 (札幌大学教授)

『沈黙の春、再来？夏鳥の減少』

玉田 克巳 (北海道立総合研究機構主査)



講演者・コーディネーターの紹介（敬称略）

遠藤 公男（えんどう きみお）

岩手県出身。小学校教師をしながらコウモリの3新種を発見。野鳥の密猟、飼い鳥問題をライフワークに。主著「原生林のコウモリ」「韓国の虎はなぜ消えたか」「野鳥売買 メジロたちの悲劇」など。元日本野鳥の会宮古支部長。



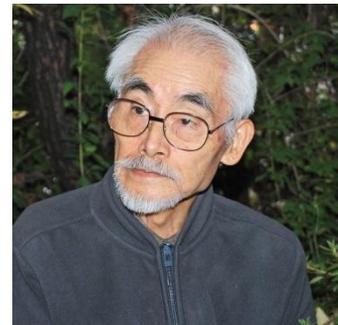
嶋田 忠（しまだ ただし）

埼玉県出身。日本大学農獣医学部卒業後、動物雑誌「アニマ」（平凡社）創刊に参加。以後、野鳥を中心に独自の世界を開拓する。千歳市在住。2014年千歳市蘭越に常設展示のギャラリーを開館。作品集に「カワセミ 清流に翔ぶ」「火の鳥 アカショウビン」など。アメリカ国際フィルムビデオフェスティバル自然部門最優秀賞など受賞。



正富 宏之（まさとみ ひろゆき）

北海道出身。理学博士。ヒグマの研究にも手を染めたが、釧路市立郷土博物館長や美唄市の専大北海道短大教授を勤め、1968年から本格的にタンチョウの研究に取り組む。その合間に高山の鳥や沼の水鳥の調査、野幌でのシマアオジの行動研究なども手掛け、2003年に停年退職。主著「タンチョウそのすべて」など。北海道文化賞など受賞。



早矢仕 有子（はやし ゆうこ）

大阪府出身。博士（農学）。北海道大学大学院農学研究科博士後期課程修了。2002年から札幌大学に勤務し、現在は地域共創学群教授。農学部在学時に、道東でシマフクロウに一目惚れの体験をした後、縁あって大学院の研究テーマとしてシマフクロウの生態研究に取り組み、既に四半世紀が過ぎ去ってしまった。日本鳥学会副会長。



玉田 克巳（たまだ かつみ）

静岡県出身。帯広畜産大学で卒業論文としてクマガラ、修士論文としてカラスの研究に従事。北海道中標津高校の事務職員、根室支庁林務課を経て、1997年から北海道環境科学研究センター（道東地区野生生物室）に就く。2003年に同センター（札幌）に異動。2010年、机も仕事も変わっていないが、組織改正に伴って現職に改名。



川路 則友（かわじ のりとも）

鹿児島県出身。九州大学大学院修了。農学博士。これまで鹿児島、つくば、盛岡、札幌と渡り歩き、おもにアカヒゲ、ルリカケス、ヤブサメ、ヤマドリなど森林性鳥類の個生態を調べてきたが、どれも満足するまで至っていない。2013年に森林総合研究所を定年退職。いまは、センダイムシクイとツツドリとの微妙な関係に興味が移っている。バンディング歴は40年近く。現在、日本鳥類標識協会会長。



川路：これから第2部を始めます。私はコーディネーターの川路と申します。



私自身、鳥の研究を初めて40年ほどになります。本日のテーマになっている希少種の保全研究の経験は少ないのですが、私が対象にしている夏鳥も同じような状況になるかも知れないということで、興味を持ってこの度コーディネーターをやらせていただきたくことになりました。どのような経緯で希少種になったのか、どうこれから保全していけばいいのかなど、難しい問題が多いとは思いますが、講演のお話を通じて皆さんと一緒に考えていければと考えています。

第2部では希少種の保全についての講演を行っていただき、そのあと第1部で講演いただいた遠藤さんと嶋田さんにご参加いただき、パネルディスカッションを行います。そこでは会場にご参加の皆さんにも加わっていただき、意見交換をしながら進めていきたいと思っております。

第2部では希少種の保全についての講演を行っていただき、そのあと第1部で講演いただいた遠藤さんと嶋田さんにご参加いただき、パネルディスカッションを行います。そこでは会場にご参加の皆さんにも加わっていただき、意見交換をしながら進めていきたいと思っております。

それでは、北海道を代表する希少種について著名なお二人から対象としていきます種についての現状や保全のあり方などについてご講演をしていただきます。

最初は、専修大学北海道短期大学名誉教授の正富宏之さんのお話です。正富さんについてのご紹介は不要かと思いますが、タンチョウの研究の第一人者として長く研究をされてこられた方です。正富先生、お願いいたします。

正富：今日は予想外でして、先ほどの嶋田さんのお話のアカショウビンがプロジェクターの関係で全部「クロショウビン」になっていたことです（笑）。この日のために白黒のグラフなどをカラーに直してきたのですが、どうも白黒になるかも知れません。お許し願います。また、このスクリーンが少し小さいので、後ろの方は少々ご辛抱くださいますようお願いいたします。 今日お話しするのは、

「タンチョウの群れを保つための情報―群れの状態を捉えるため、どのように調査を行なってきたか―」です。これが保全につながっていくのではないかと考えます。夏鳥がテーマになっておりますが、タンチョウは夏も冬もいます。冬の保全が夏鳥を減らさないためにどうつながるか、という風にお考えいただければ幸いです。

タンチョウの調査についてはご存知の方も多くいらっしゃると思います。



毎年12月5日に一斉にカウントを行っています。その調査結果は、こちらのグラフのようになります。昭和27年から行っておまして、こちらのように変動があり、実質は正確ではない部分があります。さらに数をカウントするのと同時に生息場所の調査も行ってきました。調査記録をざっと眺めてみると道南や道北にも調査記録が残っておりました。前世紀まで記録が残っているので全道にタンチョウは生息していたと考えていいと思います。1920年代にタンチョウは絶滅していたと言われていましたが、再発見されました。2カ所（道東）で、それ以外の場所では北海道ではタンチョウはいなくなっていました。状況を数で見るとこのグラフのようになります。18世紀の初めから人が食べたりしてどんどん減っていき、再発見の1926年には100羽以下になっていたでしょう。その後は実線が続いていますが、給餌が始まり、餌が十分に当たるようになりましたので、数が急激に増えて、現在にみられる数までになりました。それは給餌の効果と言っていいでしょう。それまでは十分な数がとれてないということで、正確に数えることを提唱しはじめました。現在、どのように数えるか事前の協議をしていますが、厳寒期（1月下旬～2月上旬）にカウントと冬の分布を調べています。どのような結果が得られたかという点、ここまでは以前のおり北海道が調査を行っていますが、1980年代からは私どもが参加し調査を行っており、このように右肩上がりに増えているのが分かります。一

部減っている場所もありますが、これは天候等の影響で我々が正確に数えられなかったからです。実質は今現在まできれいに上昇の傾向を示しています。

今までは数だけのお話でしたが、どこにいるかという記録も私たちは録っています。こちらの図の★印が給餌場を表しています。阿寒と鶴居の給餌場です。それ以外にいろいろ印がつけられていますが、実はこの場所にもタンチョウはいます。給餌場とは別に分散してたくさん生息しているというのがはっきりと分ってきました。こちらは数と同時に広がり方を調べるということになります。こちらを少しご覧下さい。三大給餌場というのがあります。阿寒の鶴居（中雪裡と下雪裡）ですが、この辺りは800羽位とだんだん頭打ちになってきています。しかし、それ以外の場所で家族やつがいで生息している個体がいるのを確認し、データをとることで徐々に増加していることが正確に分かってきました。

それでは夏の間繁殖状況はどうなっているのでしょうか。この写真で双眼鏡を眺めている人がいますが、これ50年前の私です。早矢仕さんは四半世紀シマフクロウを調査してきているとのことですが、私は半世紀です（笑）。この写真のように人の背丈もあるようなヨシの場所でタンチョウを探そうというのは無理な話です。考えました。この24mもある高所作業車を使うことにしました。しかしこれで観察できるのはひとつがいただけです。さらにこの高所作業車を全道各地に持って行くのは無理です。丘の上からタンチョウを探しても木の枝などもあり、探すことも困難です。

そこでセスナを使って空から調べることにしました。これは私が乗っているという証拠写真です。他にもヘリコプターを使っての調査も行いました。色々なヘリコプターを使いましたが、自衛隊のヘリコプターが小回りも効いて非常に使い勝手が良かったです。これによって同一時期に効率的・広域的に調べることができるようになりました。今ですと4時間で釧路湿原を調べることが出来ますし、根室や十勝の方へ調査もできます。そうするとどこでどんなふうに繁殖しているのかなど広域的に見えてきます。地表から見ていては分からなかったことが分かってきます。シーズンに何度か飛んで調査しますので、時期ごとや異なった場所での違いなどがつかめてきました。空からの調査は1年では

分かりませんが、20～30年続けて行うことでどう変化してくるかがはっきりわかってきます。つがいの繁殖状況の分布や密度、繁殖個体がその後どうなっているのかもわかります。

例えば、繁殖つがいの分布がどうなっているか見てみましょう。黒い点は1年間で調査した全ての巣です。釧路湿原、別寒辺牛川、根室、網走、宗谷など全道どこに巣があるか分かるようになりました。営巣つがい数の分布をみる時は時間軸（いつ、どういうふうに、変わっているか）で見えます。そうすると1991年は148つがいを確認しましたが、2000年では243つがいになり、2007年には354つがいへ、そして現在は400つがいを超す分布が見えてきます。

それでは現在のタンチョウの分布域はどうなっているのでしょうか？現在は山間部を除く道東のほぼ全域に分布していますし、道北のサロベツ原野、浜頓別をはじめ、日高、稚内の近くにある大沼、さらに紋別でも繁殖が始まりました。つまり道東以外の場所にも次第に繁殖分布の拡大が飛行調査によってはっきりとしてきました。

繁殖地の密度（営巣つがい数/10km²）についてですが、（グラフの色のことで笑）

例えば、十勝ではここ20年で数が増えて密度が高くなってきています。こちらの白い2つの部分は20年経っても密度が同じです。これはどこかと言いますと、霧多布湿原です。高層湿原ではタンチョウは繁殖しないということが分かっているので、ここではもう満杯になっていて、20年前から一杯ということで変わらないということを表しています。

さらに営巣環境を見てみましょう。どこかにタンチョウがいます。空からの調査の時はタンチョウがいることが分かって撮影しています。もう少し大きくしてみましょう。これでわかりますか？実はここにいます。そこに生えているのは全てヨシです。このような環境でタンチョウが営巣するのは常識です。しかし次の状況をご覧ください。

これは森林ですね。森の中にタンチョウがいます。巣に座っています。どこで繁殖するかというのはどうやらタンチョウによって違いが出てくるようです。

ここにタンチョウがいて、相棒がここにいます。巣の上に立っています。拡大すると卵も見えます。枯れ木のように見えますが、この時期ヤチハンノキの葉が出ていない時に撮ったから写っています。6月くらいの葉が出る時期になると何にも見えません。飛ぶ時期が重要になります。最近の状況を見てみますと、発見した巣の割合をとっているのですが、黒い点がばらついていますが、だんだんと樹林の中で巣を作る割合が増えてきています。つまり湿地の開けたヨシ原の鳥ではなくなってきていて、林の中の鳥と言ってもいい位になってきています。割合としてはまだ全体の一割程度で少ないのですが、林の中で営巣する例が増加傾向にあります。

さて、再び地上に降りてきて調べなければならぬこともあります。夏の間は繁殖地に移動し、縄張りをつくり繁殖し、それが終わると越冬地へ移ってきて群れを作って生活しますが、これを逐一追跡します。さらに生存や繁殖状況を調べなければいけません。ツルは千年生きると言いますので、これを実証するには私も千年生きなければなりません。しかし、それは難しいので、どのように調べるかという个体標識を付けておきます。標識を付けておけば、その个体がいつ生まれていつ死んだかが分かります。その間にどのようにつがいを作り、繁殖をするかなどいろんなことが分かります。

さらに最近の重要なツールとして電波発信機の情報もあります。例えばどのような移動をするか、というのを調べる際にはラジオテレメトリーという方法を使い、非常に有効なツールとして用いられています。それには日付が入れられています。この写真は2002年です。地上から場所を調べますが、非常に効率が悪いのですぐにとってかわってタンチョウの背中にGPSの発信機を付けることになりました。これを使いどこにいるかというのでも調べます。

こちらはごく初期のデータですが（以降、連続画像で解説）、3月はここで越冬していました。ここは釧路湿原、ここは別寒辺牛川、ここは鶴居村だと思ってください。4月になって前半はまだここにいました。4月の後半になると別寒辺牛川に移るというのが分かります。5月～10月のデータにはずっと別寒辺牛川を生活の場に行っていることが分かります。12月～1月にかけてはどうなった

かといいますと、ここから鶴居村に戻ってきてここで冬を過ごします。次のシーズンの前年はここでウロウロしていましたが、さっさと別寒辺牛川に移っています。最初のもは電池式だったので電池が無くなって追跡が出来なくなることがありました。ただその際にどういう場所を使っていたかはしっかりと現地に行って記録しています。それらを整理するとこんなふうになります。これはある個体の利用環境の割合ですが、この大きい黄色は採草地です。道東ですので採草地が多くあります。青い場所は湿地です。タンチョウは湿地の鳥と言いますが、湿地を使っているのはこの時期とこの時期くらいでこの採草地を多く使っています。この部分とこの部分の別のものが入っているのでちょっと見てみましょう。この青は何かといいますと平地です。このような部分は丘陵の上なのです。釧路地域は丘陵も低いのですがこの丘陵地の上や傾斜地を使っているのが分かります。車で走りながら探しまわりますが、「いない、見つからない」と思っていたら、実は丘の上にあったのです。移動の状況というのはそれぞれ異なっていますが分かってきました。

さらに、営巣・生息環境では、この茶色のヨシの巣の状況を現地で調べます。データを見ますと高層湿原、中間湿原、低層湿原にどれだけの巣の数があるかをみると、高層湿原にほとんど巣がないことや、ヨシの高さでは1mほどで多く、2mを越すような高いヨシの密生する場所にはいない条件というものが分かってきます。

もうひとつ重要なことはそこに餌があるかですので、このように近くの川に入って生物調査なども行ったりします。

先ほども話しましたが、個体識別はとても重要で便利でよい手段になってきます。足環やテレメーターを付けますが、大人数がいなければできない作業です。またヒナを手取りしますのでこれはそのための作戦会議の風景です。この写真は実際に捕まえて足環を付け、嘴の長さや体重測定を行うなどの標識調査（バンディング）を行っているところです。最近ではこのようなデータが得られるようになってきました。これは注射器で血液を採取しているところで、DNA分析をして遺伝研究のために役立てます。

現在は、個体標識をつけて野外で分かるようにしていますが、非常に重要な情報が得られています。これから移動経路を矢印で示しますが、どこが太くなるかを見ていてください。(道東地域の図を示しながら)ここで標識を付けたメスの個体が、次にどこで繁殖をしたかを表しています(根室→阿寒)。繁殖するには最低3年、4~5年かかることもあります。根室で標識を付けたのに、阿寒にきています。同じくメスですが別海から鶴居、そして別海から根室、標津から根室、根室から標津などとなり、比較的移動距離も長いことが分かります。一方、ここに短い矢印が付いています(根室周辺域)。ここで繁殖して、すぐそばのここに来ています。これもすぐそばに来ていますね。実はこの個体はオスです。オスは自分が生まれた場所のすぐ近くで繁殖を始めるということがはっきりと分かります。それではこの図の長い距離は何なのかという話になりますが(根室半島から根室)、これにはひとつの条件があります。この場所で生まれましたが、根室半島にはもう繁殖する場所が限られるほどで少なくなったので、ここで生まれた個体は行き場がなく移動したものと考えられます。これは環境条件による移動といえます。

それではDNA解析ではどのようなことが分かるか見てみましょう。遺伝子の組成を見てみるといくつかのタイプが出てきます。北海道ではGj2とGj1の2種類しか出てきません。極端な言い方で誤解を招くかもしれませんが、ミトコンドリアはメスからしか遺伝しませんので、北海道のタンチョウは2羽のタンチョウから生まれてきたとも言えるわけですが。そのうち、Gj2が8~9割で、残りがGj1です。もうひとつ、ごく最近たった1羽だけやっと見つかった3種類目ですが、北海道にはこの3タイプしかありません。道外の動物園で飼育されているタンチョウのほとんどは大陸のタンチョウです。全てを調べたわけではありませんが、少なくともこれだけの種類が見つかっています。広い大陸を調べればもっとタイプも見つかるでしょう。つまり北海道のタンチョウは遺伝的な多様性が低いと思われれます。

今までは生活史を中心とした個生態学的研究という言い方をします。それに対して群れを全体として捉えようとしたものを群集生態学的研究と言います。

これらふたつを統合してひとつの『タンチョウ』という種類を理解していく必要があるのでしょうか。このうち、比較的やりやすい調査を『二次元的調査』という名前を付けています。例えば1年だけ数やその広がりを調査するのを二次元的な調査と言えます。それをもう少し時間軸をしっかりと含めて長期的に観察するといろいろなものが見えてきます。つまり動物は固定的な状況ではなく常に変化していく、時間とともに変わるので、我々はそれを捕まえることが必要になってきます。それによって生活史の解明ができるし、その変化の状況からその先の変化の予測が立てられるようになります。単に動物だけの問題ではなく、植物や地質、陸水学などいろんな分野との関連が必要になってきます。これらを総合的に見て全体の状態を掴んでいくという訳です。最終的には、我々人間とタンチョウとの関係がどうなっていくのかというのを理解していかななくてはならないと思います。

そのために、どうすればいいのかという取り得る有効な方法が考えられます。例えば将来どうなるのだろうかという一つの目安として、ポテンシャルマップがあります。つまり北海道にタンチョウが生息できる環境がどれだけ残っているかを表示することができます。(北海道図を示し)この黒い部分が一番適した環境を表していて、道東、十勝、サロベツ、大沼、浜頓別、網走、紋別などですが、タンチョウが来てなくても生息に適した環境として残っているのはもうこれだけしかありません。つまりこれら地域には将来的には期待はできるが、それ以外の環境ではあまり期待できないということを表しています。

そこでこの計画を遂行していくにはGDテーブル(CDF)というのを私は推奨していて、要するにラウンドテーブル(円卓会議)を作りましょうということです。それはコンパクトなものでいいのです。小さくてもいいのでみんなで相談していこうという考えです。タンチョウを中心として関係の行政や研究者、そして地域の住民などとの共同作業が必要であり、みんなで集まって情報を共有していこう。そして共有したらどうしたらいいかをみんなで考え合意形成をして、それが済んだら計画を立てて、きちんと実施します。それもきちんと目配せしながら行っていきます。最後にそれがどうなったかを評価することが大

切なのです。評価が正しいか、修正が必要かを議論し、正しければフィードバックして、引き続き実施します。成果が上がっているならさらに構築し、そうでなければまた考えていく調整が必要です。このような中で住民参加はぜひとも必要です。今まで行政と研究者の間の話し合いはない訳ではありませんでしたが、そこに地域住民が参加するということがほとんどありませんでした。住民参加が非常に重要だと私は考えています。

最後にクエスチョンマーク（？）がつきます。「では誰がやるのか？」です。誰かが必ず推進するというを実際にやらなければ物事は進みません。ここが一番の問題かと思っています。

この写真（青空をバックに飛翔するタンチョウ）は、嶋田さんの写真にはずっと劣りますが、青い空が写っていていい写真です。

どうもありがとうございました。

川路：ありがとうございました。

一時は激減していたタンチョウの数は戻ってきましたが、ただ単にそれで「よかったね」ではなく、詳細に個体群の調査研究を行い、それを将来ビジョンまで持っていける保全研究をされています。実際に希少種の保全としては成功している部類に入るのではないかと思います。そういった貴重なお話でした。

続きまして、札幌大学教授の早矢仕有子さんに「シマフクロウのこと・・・」と題しましてお話しいただきます。早矢仕さんもお紹介するまでもありませんが、「シマフクロウと言えば早矢仕さん」「早矢仕さんと言えばシマフクロウ」と言われるぐらい、正富さんに言わせると半分くらいということですが、長年シマフクロウの研究をされてきています。北海道を代表する希少種についてお話しいただきます。よろしくお願いします。

早矢仕：こんにちは。早矢仕と申します。今日はこれまで大御所の方たちのお話でそれに続く私に誰か同情してほしい気持ちです。お題をいただいた時に「シマアオジ」や「夏鳥」と言われまして、どうしようか考えました。夏鳥でもな

いし、「シマ」が付くだけで共通点がないじゃないか？とよせばよかったのですが、けど……。最初はシマアオジと若干こじつけて進めることにしたいと思います。その後は、ここにいらっしゃる方々の8割に嫌われるようなお話になるかも知れません。よろしくお願いします。

嶋田さんがいらっしゃるので、下手な写真は出せないのですが色々ごまかしながら進めていきますが、シマフクロウだけではなく、広いお話をします。



シマアオジを含む野鳥では、個体数が多く分布が広い普通種は絶滅しづらいと言われますが、それはあまり過信しすぎることはできないのではないかと最近言われています。その代表的なのは、数があんなにいたのに絶滅したことで知られている北米大陸のリョコウバトがあります。18世紀初頭まではすごい数でしたが、ナチュラルリストのJ. J. オーデュボンが「その大群が通り過ぎたら、真昼の太陽は日食のように曇っていた、その群れは3日間途切れることなく続いた」と言っています。リョコウバトは南北に渡り（旅行）をするのですが、一斉に渡りをすると3日間太陽が見えなくなるほどだったと言われています。数も推定ですが、50億羽ほどいたのではないかと、今の世界人口の70億には匹敵はしないのですが、それに近いくらいいたというのは確かです。人というのはその数すらも絶滅させてしまえるほどの力を持っていて、それもアメリカ大陸の開拓が始まって100年ほどで絶滅させたというすごい例です。1914年に最後の1羽のマーサが動物園で死んで終わってしまったと悲惨な例がよく語られます。最近はDNAで復活させようという話も出ていますが、このようにいくらかいてもいなくなる時はいなくなります。それも人の力によって起こるといいます。

今日のテーマのシマアオジですが、今年話題になっている野鳥の論文があります。実は共著者のシンバ・チャンさんが本日いらしています。そこに出ている地図ですが（世界図にシマアオジとシマフクロウの分布を示しながら）、本来シマアオジはこんなに広い場所に生息しているはずですが、それが今日お話があるように壊滅状態になっているということです。リョコウバトではないですが、シマアオジも一網打尽に獲られて、たくさん食べられているようで、本当にいなくなるかと言うとどうやらいなくなるらしいということです。それに比べ我がシマフクロウは世界中でもとこの図の地域にしか生息していません。ロシアの日本海側と北海道に生息しており、実際は世界中に何羽いるのかもわからないとされていました。以前は数百羽と言われていたのですが、そこまでは少なくはなく、最近では数千羽はいるでしょうとなっています。ちょっとしたことで、この地球上からいなくなっても何も不思議がないのがシマフクロウです。分布域が非常に狭く、数が少ない（生息密度が低い）鳥はもちろん絶滅しやすく、ちょっとしたことで絶滅してしまう可能性は高い。

そんなシマフクロウは森林がなくなり棲む場所も減ったりして1984年から国が保護をしています。この写真のように人工的な場所で足環をしたシマフクロウを嶋田さんの前ではお見せしたくはないのですが保護しています。シマフクロウはご存じの通り魚を主食としています。魚のいないところで給餌池を作って、魚を放して国が保護している訳です。今では北海道内12か所の生息地で行っています。こちらは足環をつけたシマフクロウがヤマメを獲って、ドヤ顔をしているところです。

もうひとつは、巣を作るというと正確ではありませんが…。シマフクロウは木の洞に入って繁殖をしますが、翼を広げると1m80cm、全長70cm、体重4kgほどと体が大きいので大きな洞がなければ子育てが出来ません。その大きな洞がどんどんなくなっているので大きな巣箱をかけて保護しています。アカゲラのような巣では済まないのです、シマフクロウ用の大きな巣箱をかけます。こちらは環境省のレンジャーが写っていますが、釧路で環境省が行ったイベント

で子供向けにシマフクロウを知ってもらうために、実物大のシマフクロウとイトウのぬいぐるみもみえます。

巣箱はFRPという新素材を使っています。私はこだわりがあり、自分の調査地点ではプラスチックの巣箱ではなく巨大な高級な木製巣箱を使っています。しかし、重さが150kgほどにもなってしまい、作ってからどうやってあげるのか困ってしまいました。現在、北海道中に述べ300個ほどの巣箱をかけています。実は今、北海道には140羽ほど、つがいにして50つがいしかシマフクロウはいません。それなのにそんなに多くの巣箱が必要かと言われるますが、シマフクロウは自分の縄張りに複数の営巣場所を作りたがりますので、生息の可能性のある場所も含めて実際の数よりも多くの巣箱をかけています。このような保護を30年以上続けています。その間に巣立った雛に標識（足環）をつけています。

こちらは1985年～2013年まで毎年何羽の雛に足環をつけたかを表したものです。巣立ち雛に足環をつけていますが、422羽に付けてきました。このすべてが生きていれば数百羽のシマフクロウが北海道にはいる計算になりますが、そうはいきません。ここ数年は年間20羽ほどの巣立ち雛に足環をつけています。シマフクロウはひとつがいが年に1回子供を1～2羽産みます。10～15つがいが子供を産んでいます。この図も黒くなっていますが、この部分が人為的に給餌している生息地で生まれた雛の数で約全体の4割強を占めています。先ほど12か所で餌を与えているというお話をしましたが、つがいの割合から行けば、12か所は全体の3分の1くらいになり、給餌しているところではヒナが出るのが多くなっています。餌を与えているので、当たり前ですが、食べ物のあるところでは高くなっています。

こちらの図は、正富先生の図と、虹色とは考えもしなかった・・・(笑)

こちらはシマフクロウから話が若干広がりますが、国が定めた絶滅が危ぶまれるレッドデータブックというのがあり、そのレッドデータブックの中では絶滅危惧に瀕している猛禽類の存続を脅かす要因は何かなどが書かれています。すなわちカテゴリーごとに分かれていて（細かいところは省略）、その中のワシ

タカ、フクロウ類では15種がレッドデータブックに掲載され、それら減少理由などが記されています。一番多いのが森林伐採で、15種類のうち9種類が含まれます。そして湖沼、河川、海岸、湿地、草地が無くなった、道路建設、ダム建設など、人による土地開発によって生息環境などが悪くなったと選んでいるものがこれだけあります。ちなみに猛禽類の15種が何かを言いますと、絶滅が一番危ないとされる絶滅危惧ⅠA類（CR）は、カンムリワシ、ワシミミズク、シマフクロウ、キンメフクロウと、フクロウ類が大活躍です?!

このようなことを言っただけは誤解されるかもしれませんが（笑）、この中でシマフクロウ以外はもともといませんでした。そして絶滅危惧ⅠB類（EN）は、リュウキュウツミ、オガサワラノスリなどのローカルでマニアックな種がいて、クマタカ、イヌワシ、チュウヒとなっています。そして絶滅危惧Ⅱ類（VU）はオジロワシ、オオワシ、サシバ、ハヤブサ、ダイトウコノハズク、リュウキュウオオコノハズクが入っていて存続を脅かしている原因なのです。この辺はレッドデータブックを書く時に著者はできるだけカテゴリーから選ぶ（書くように）という注意事項があります。どうしても含められない場合は、その他にして具体的に書くように求められます。

こちらは著者があえて他もダメだという要因を言っていて、複数種で選ばれているものだけを書いています。そうすると複数種で選ばれていることにカメラを撮ったり、見に行ったりという故意に人が近づくことが4種入っています。アウトドアレクリエーションで人が近づきすぎているのが3種、電線等の感電死が3種、風力発電のバードストライクが3種、鉛中毒が2種入っていて猛禽類ならではの理由です。このカテゴリーに入っていない要因は国が一般性は低いと判断しているからで、しかも鳥の中でも猛禽類で選ばれているので、猛禽類ならではの問題だと考えられます。シマフクロウは高いところを飛びませんのでバードストライクはありませんが、オジロワシとオオワシなどが入っています。鉛中毒もそうです。感電死はシマフクロウも入っていますが、いくつかの猛禽であります。人の接近というのがこの中で一番多いですが、私はこれに

関してここ2、3年、人の近づきすぎについて突っ込んだ調査をしていますので、そのお話をさせていただきます。

数が減ってしまった要因と最後にとどめを刺してしまった要因あるいは極端に減ってしまった後に回復する時に妨げる要因というのは必ずしも一緒ではありません。生息環境が開発などで悪くなったことはほとんどの絶滅危惧種が減った原因になっているのです。しかしそればかり見ていると新たな違う要因で数が増えないあるいはとどめを刺してしまった要因を見逃しかねないと思うのです。一方、シマアオジが現在極端に獲られすぎて、とどめを刺されている時期だとは思いますが、北海道にシマアオジが来ないことでシマアオジがもともといた環境が顧みられなくなります。環境アセスメントの委員などをしている時にとっても感じたのですが、希少種がいると一生懸命に何とかしようしますが、「昔希少種がいたけど、今いないよ」というところに、「希少種がいたんだ」というふうに環境を守るべきが基本的にはないのです。だから、シマアオジが極端に食べられて（捕られて）減っているということが原因であるとしても、先ほど嶋田さんもおっしゃっていましたが、環境が変わればみんなが気づきます。いざ、そこで回復させ始めた時に、日本に渡ってきたら棲んでいた場所の環境が変わって、今度は日本でとどめを刺してしまうという危険性もあると思います。それと同じで猛禽類は開発行為で棲めなくなっていますが、森林がなくなったとか、湖の環境がどうこうなったから、とばかり思っていると意外と違う要因でどんどん悪影響が積もり積もっていくこともあり得るあることも知っていただきたいと思います。

シマフクロウに関して、国は昔から生息地を公表していません。人が近づくことでシマフクロウに悪影響が出るのが嫌だからです。巣箱や給餌で保護してきましたが、それはシマフクロウを誘引していることになります。特定の場所に誘引すると目立ってしまいます。シマフクロウは10~15kmほどの縄張りを持って家族で暮らしていますが、その中の特定の場所に給餌や巣箱をかけると集中的に利用する場所が出来てしまい、そうすると人からするとそこに行けばかなりの高確率でシマフクロウに会えるという場所を作ってしまう。

私が四半世紀調査をしている十勝地方のある場所で、年毎に人がどれだけシマフクロウを見に来たりというより、写真を撮りに来たりしているかを調査しました。シマフクロウの調査を始めたばかりの昔の私は誰も来ないので人が来ることなど気にも留めていませんでした。1990年代の終わり頃から人が見に来るようになったかと思っていたら、十数年空いています。2013年になって急に多くの人たちが訪れるようになってきました。1年中(365日)来る人たちをチェックしている訳ではないので、図に明記されている日数で、単純計算をすると一カ所のシマフクロウの生息地に年間800人が訪れていることとなります。この13年間で5倍以上に増えているのは何があったのでしょうか？挙げられるのがインターネットの普及で特にSNSです。シマフクロウの来る宿がありますが、「これは金になる」というようにFacebookなどで「シマフクロウが来る」と宣伝をします。

国は基本的には隠していますが…、そこで見に行った(写真を撮った)人たちがブログなどで自慢げに写真を公開したりします。今は昔と違って誰でも撮った写真や書いたものを公表できるようになっています。そこで、シマフクロウが写っているブログなどをチェックしたところ、4割くらいに特定の宿の名前が書かれています。さらに写っている写真や前後の記事を見ていくと4分3ほどがどこの宿でいつ撮ったかが分かります。「ここで撮ったよ～」と良い写真の記事が出ると、1週間後には人がたくさん来るようになります。本当にすごいことだなと驚きます。そうしてどんどん広がって旅行会社もツアーを行っています。これは「ワイバード」という会社の商品で、「撮影の旅 シマフクロウの親子とタンチョウ10名様限定」というのがあると、あっという間に定員に達するようで、こちらがやりたくなってきます。なかなかいい値段のツアーです。そのツアーで親子のシマフクロウを撮影し、見るとすぐにどこの宿か分かっ

てしまいます。

これらについては、とても難しい問題です。来られる皆さんらが鳥を思いやっていただけの方ならいいのですが、そうでない場合もありますし、本来入ってはいけない場所に知らずに入ってしまうこともあります。国であれば私有地

と国有林の境目に柵を張って、立ち入り禁止の看板を立てますが、それでも無視して入っていく人がいますし、悪質な場合になるとネイチャーガイド個人が名前を出してツアーを行い、立ち入り禁止の中に入って営巣中のシマフクロウの巣のすぐ下まで行かせて写真を撮らせたりもしています。例えば500人位来ても495人位は普通のちゃんとした人たちなのですが、その中に数人とんでもないことをする者がいると、繁殖阻害でその場所がダメになってしまいます。今度はそのとんでもない人たちが巣の真下まで連れて行ってくれたという話が広がると、そのガイドにまた客がつくという悪循環に陥ります。あまりにもひどくなると国は給餌池や巣箱を縄張り内で移設したりもすることになり、場合により膨大なお金もかかると同時に、だんだん何をやっているのか分からなくなってきました。そうなるこそこまでして巣箱をかけたり、池を作らなければいけないのかとも思ってきました。結局は、こうしたことはたちごっこになってしまい、隠しても誰かがまた見つけてとんでもない悪質な侵入者が入ってきますので、根本的な解決にはなりません。どうすればいいか悩みますが、このインターネット時代に情報を隠すことは無理なのです。

そこで、シマフクロウについては「何を誰にどのような方法で公開し、正しい情報を発信して関心を引き付けられるか」ということをやらなければならないと考えています。まずは、どういった人たちがシマフクロウを見に来ているのかを知ろうということで、知床と十勝でアンケート調査を行いました。十勝では宿の人たちが協力してくれたのはありがたいことです。また円山動物園に現在2羽のシマフクロウがいます。普段は公開されていませんが、時々円山動物園の飼育員によるガイドツアーが行われたりしています!?.これはシマフクロウだけではなく、オオワシのつがいや猛禽類のリハビリ施設もツアーに組み込まれていますが、参加者の多くはシマフクロウが見られるから参加されている場合があります。このガイドツアーに来た人たちにもアンケート調査をしています。

ここではどのような人たちが来たかだけをお見せします。知床にシマフクロウに餌付けして宿泊客に見せている宿があるのですが、ここに来る人は8割が

道外の人です。十勝は半分、円山動物園は道内、しかもほとんどが札幌近郊の人になります。さらに調べてみると野生のシマフクロウを見に来る人たちは男性が多いのに対して、動物園に見に来る人は女性の比率が高いです。知床や十勝の野生のシマフクロウを見に行く年齢は50代から70代の中高年が多いです。これにはいくつかの要因があります。まずはほとんどが道外の人たちですので、来るまでに時間がかかります。そしてお金もかかります。さらにほとんどの人たちが写真を撮りに来るのでカメラが必要になります。いくら宿で撮影できるからといっても夜間ですし、離れていますので、スマートフォンでは撮れず、ある程度お金のかかる望遠レンズなどが必要になってきます。このようにある程度時間とお金がかかると、仕事を終えたりタイア組になります。一方、円山動物園はお母さんと子どもの親子や若いカップルがデート感覚で訪れたりと全く年齢層が異なることも分かりました。

生きものの保全・保護を考える時は次の世代に関心を持ってもらわないとうまくいきません。今の状況ではシマフクロウには負荷をかけてしまい、さらに若い世代には関心を持ってもらえないというジレンマを抱えていました。そこでお試しですが、こちらインターネットを利用してシマフクロウの監視をしてもらうことになりました。そこにさらに情報を書き加えることで知識も持ってもらい。ヒナはたいていの人が見たらかわいいと思うので、ヒナを見てもらうことで関心を高めてもらおうと考えました。巣の中にカメラを入れる調査は昔から行っていたので、それを携帯電話の回線を使い画像を配信するという、IT技術を活用した見守り作戦を行うことにしました。

シマフクロウの巣が公開されているということが広まれば、変な人たちが近づけなくなるのではないかと思い、最近始めました。この写真は親鳥がヒナに餌を与えているものですが、これらを見てもらうことで関心を持ってもらい、且つ見守っていただきます。このような取り組みを昨年から極限定的ですが、公開して感想なども寄せてもらうようにしました。いろいろと制約もあって完全な公開が出来ないという辛い事情もあります。これらはまだまだ試しの段階です。直接見せるにはいろいろ難しい問題がありますが、見たい人、見せ

たい人、シマフクロウを最優先にしたい人たちの間で意思の疎通をしてウィンウィンの関係を築きたいと思い、いろいろな人たちに嫌われながらも知床に通って行って、みんなが満足できる解決方法があるのではないかと思います。それでも直接見に行ける人たちは限られた層になってしまうので、間接的には全国あるいはインターネットなので世界に向け発信してみんなで見守ってもらうということが今後はできるのではないかと思います。これらを推進するうえでも国にはさらなる援助等を期待したいです。どうもありがとうございました。

川路：ありがとうございました。

シマフクロウは大きくて目立つ鳥の中でも、昔から絶滅を危惧されてきた鳥でした。長年保全策をとっていたにもかかわらず、新たな問題が時代とともに出てきたということで、それに対して保全策にも取り組んでいるという興味深いお話でした。

次に、今回のテーマにもなっている夏鳥のお話ですが、シマアオジの研究に積極的に保全策等に取り組んでおられる北海道立総合研究機構の玉田さんからお話をいただきます。

玉田：2回目の登壇となります玉田です。

先ほど正富先生からはタンチョウ、早矢仕先生からはシマフクロウの話がありましたが、私は行政的なお話をさせていただきます。こちらに書かれているのは環境省のレッドリストの指定状況のランク表です。一番上が「絶滅」、一番下が「準絶滅危惧」となっていて、上の方が深刻で下の方が比較的数字はい



るというふうにみます。先ほどの早矢仕さんの方からも話にありました絶滅危惧ⅠA類、ⅠB類、Ⅱ類というのが、いわゆる絶滅危惧種で国の保護につながっているというものです。ただレッドリストに載るからと言って保全の対象になるという訳ではありません。レッドリストとは別に法的に「種の保存法」というものが施行されていて、この中で「国内希少野生動植物種」というのが指定されるというのが国の仕組みになっています。要するにレッドリストは絶滅の度合いを示したランキングだけであって、「種の保存法」に指定されて初めて保護が動きます。「国内希少野生動植物種」で捕獲の規制や譲渡・受け渡しの規制があっても、他に鳥獣保護法などもあり、大した規制にはなりません。しかし、この種の保存法に指定されると保護増殖事業計画を策定できるというステップに入ることになり、保護増殖事業が実施されます。先ほど正富先生の方から円卓会議（CD テーブル）で関係者会議などのお話が出ましたが、そこまで来れば行政や関係者が集まって作戦会議など話ができるようになるのです。タンチョウやシマフクロウは既に指定されていますので、保護増殖計画も立てられています。タンチョウの給餌や調査、シマフクロウの巣箱などはこの事業の中で動いているものであり、現在、ともに個体数が増えてきています。国の政策に基づいて成果が少しずつ上がってきているのだと思います。

残念ながらシマアオジは現在ランクの中では一番高いところに指定されています。また、アカモズもこちら「絶滅危惧ⅠB類」に指定されていますが、種の保存法に基づく指定は進んではいません。つまり作戦会議を立てる場がないというのが現状です。先ほど嶋田さんのお話の中にもありましたが、アカショウビンはもっと状況が悪く、「準絶滅危惧種」にもなっていません。この後のパネルディスカッションでもこの話になると思いますので、行政的には作戦会議を開くこともできる状況ではないということ、皆さんご理解いただければと思います。

早矢仕さんのお話の中にも出てきましたが、カンプ（Johannes Kamp）さんについてです。まだインターネット版でしかオープンになっていませんが、今年2015年の5月か6月に「シマアオジの世界的減少について」に関する論文が出

ていて、実は今日、この論文の共著者でもあるシンバ・チャン (Simba Chan) さんが来場されていますので、この後はシンバ・チャンさんから直接お話を聞きしたいと思います。シンバ・チャンさんを紹介します。所属はバードライフ・インターナショナル (BirdLife INTERNATIONAL) です。このマークをご覧ください。なったことのある方もいらっしゃるかもしれませんが、簡単にご説明すると国際 NGO です。名誉総裁は高円宮妃殿下です。殿下はもちろん皇族ですが、とても鳥に詳しい方で鳥の写真集なども出版されています。2010 年には札幌でも講演などをされ、円山公園でバードウォッチングのご案内もさせていただきました。殿下が名誉総裁をされているので日本の組織と思われがちですが、IBA (Important Bird Area) という、世界で野鳥の重要な生息地を守るための指定等に関わります。また知床の世界遺産の指定の際にも出てきましたが、国際的に自然保護で大きな権限を持っている IUCN (国際自然保護連合) の作成したレッドリストのうちの鳥の部分は、このバードライフ・インターナショナルが作っています。

今回シンバさんは自費で来ていただきました。もしよろしければバードライフ・インターナショナルへの賛助金が一口 5,000 円ですので、ご賛助いただければ幸いです。

私の話はここまでにして、シンバさんのお話をお聞きください。

川路：当初の予定にはありませんでしたが、シマアオジの研究の最前線にいらっしゃるシンバさんにお話しいただきます。よろしく願いいたします。

シンバ・チャン：少し緊張しています。私はシンバ・チャンと申します。香港出身でバードライフ・インターナショナル東京の主任研究員をしています。日本語がうまくはありませんがお話したいと思います。

シマアオジのお話をしますが、内容は、今年の 2015 年日本鳥学会 (兵庫県立大学) の自由集会「急速に減少するシマアオジ *Emberiza aureola* と、その回復方法の模索」で紹介したものです。シマアオジに関する自由集会は今年が初

めてではなく、ご紹介いただいた玉田さんらと 12 年前の 2003 年の日本鳥学会（弘前大学）の自由集会「シマアオジ激減！－原因と対策は？－」も企画しています。



早矢仕さんからリョコウバトの話がありました。シマアオジの減少については、論文の共著者のドイツ人やロシア人も 21 世紀のリョコウバトに似ているのではないかと指摘しています。リョコウバトは 19 世紀の初めには世界で一番数が多い鳥でした。シマアオジも 30～40 年前はユーラシア大陸でもヨーロッパとアジア北部などで見られ、スズメ目の中

で最も数の多い鳥類で、30 年前の推定個体数は数億羽といわれていました。繁殖地域は日本からフィンランドまで幅広く、ロシアの研究者が調べたシベリアでの繁殖密度は 1ha で 1 つがいとなっています。しかしながら、1990 年代からは個体数が激減し、ドイツの研究者の調査によるとこの 30 年間で減少率は 84.3～94.7%に達しています。2012 年の調査では東ヨーロッパと中央シベリアでは繁殖していません。本種は、2004 年までの IUCN のレッドリストでは指定がありませんでしたが、2004 年からは「準絶滅危惧種」、2008 年には「絶滅危惧Ⅱ類」、2014 年からは「絶滅危惧ⅠB類」に指定されています。カンプ先生の 30 年間のデータで 90%以上減少していれば「絶滅危惧ⅠA類」になる可能性があるとのことでした。

シマアオジの減少の原因はおそらく 4 つが考えられます。①密猟、②生息環境の喪失、③農薬による環境汚染、④生息環境の喪失と環境汚染の同時発生の要因が考えられます。論文の分析でも減ったことを一番よく説明できる原因は中国での密猟となっています。この写真は 1997 年 11 月に私が撮った写真ですが、ここに写っているのは、ほとんどがシマアオジです。毎年秋の渡りの時期になると大きな網で捕獲します。この時の香港での値段は 12 羽で 70 香港ドル

(1,200円くらい)と安かったです。しかし、現在の香港でこのような状況を見ることはありません。

今の中国政府はシマアオジの減少について深い懸念を示しており、近く関係部局では保全対象種のリストの更新を検討していて、私が聞いたところでもシマアオジは重要な種として位置付けられるようです。

この写真は密猟されたシマアオジですが、摘発押収されたものです。

私がここに参加した重要な理由は、9月の鳥学会の自由集会を踏まえ、また今日ここに参加された皆さんの意見を聞いてから、中国に行って関係者に、日本での鳥に関する話をする事です。日本と中国では、渡り鳥の保全協定が結ばれています(日中渡り鳥等保護協定)。中国の人たちも関心があるので、日本での保全に対するアイデアを中国に伝えることが重要なのです。もうひとつは中国以外にロシアも関心を示しています。先週行われた日露会議でも出ましたが、ロシアでもシマアオジの繁殖個体数は極めて厳しい数字になっているようです。こちらの図はロシアと東シベリアの繁殖地です。ロシアでも同じ問題があるので、これからはシマアオジの調査研究及び認識について日本とロシアは協力していくことが大事です。それは保全計画を立てる上で重要であり、また今日のパネルディスカッションの意見も大切だと思います。

実は、こうした問題は、中国とロシアと日本だけではなく、3日前、アフリカでヨーロッパとアフリカとアジアの森林鳥類のモニタリングワーキンググループ会議がありました。この会議は「CMS ボン条約(移動性野生動物種の保全に関する条約)」と関係していますので、行動計画の中に含まれます。私からの提案ですが、シマアオジは、ロシア極東地域には4亜種がいて、北海道とサハリンは同じ亜種になります。したがって、北海道はロシアと協力した調査や法整備に取り組んでいく方が良いと考えています。

この後のパネルディスカッションを楽しみにしています。短い時間でしたがありがとうございました。

川路：まさに現在のシマアオジの問題点をグローバルかつ最新の情報でお話しいただきました。パネルディスカッションの準備がありますので、17時まで休憩いたします。

川路：お待たせしました。只今からパネルディスカッションならびに意見交換会を始めたいと思います。今日は第1部で遠藤さんと嶋田さんにお話をいただきました。第2部は正富さん、早矢仕さん、玉田さん、そしてスペシャルゲストのシンバ・チャンさんにお話しいただきました。パネルディスカッションでは、登壇された方たちが前にお座りになって意見交換で本日のテーマについて深めていきたいと思います。まずは、今日は各演者の方々のお話の後に質問時間を設けていなかったもので、「これだけは」というものがあれば最初にお受けしましょう。ご質問がある方は名前と所属を言ってからお願いします。

梅木（日本野鳥の会小樽支部）：嶋田さんにお伺いします。アカショウビンは「雨乞いの鳥」という俗名もありますが、「雨」とアカショウビンのさえずりの関係はありますか？また、地域的にどのように関連がありますか？



嶋田：渡来してきてなわばりが決定して抱卵までの間が一番よく鳴くのですが、ちょうど本州が梅雨に入った頃（5月）なんですね。梅雨入りして一番多く鳴く時期と雨が多くなる時期が重なっているからそう呼ばれるようになったのだと思います。しかし北海道ではまだ渡来していない時期ですね。あまり関係ないと思います。

梅木：先ほどのお話ですと5月下旬に渡来してくるとのことでした。私も数年前の5月25日早朝に小樽市街の自宅でアカショウビンのさえずりを聞いた経験がありました。日中はあまりさえずらないのでしょうか？

嶋田：札幌ですとあと1週間ほど早くなりますね。アカショウビンは日の出とともに森に行けば一番効率よくさえずりを聞けますが、日中はあまり鳴きません。

梅木：他の鳴禽類と同じということでしょうか？

嶋田：同じです。中高年の方たちの観察に向いている鳥です。

猿子（日本野鳥の会札幌支部）：遠藤さんにお聞きします。シマアオジが中国でよく食べられているというお話がありましたが、私は中国人の国民性がよく分かりません。北海道のシマアオジが中国で食べられているとなると我々もアクションを起こさなければなりません。中国人の国民性を考え、どのように起こしていくべきなのかご助言をお願いします。

遠藤：難しい質問です。シンバ・チャンさんの方が詳しいと思いますが、私が体験したことをお話します。

中国の儒教は日本にも1000年以上前から深い影響を与えています。中国では孔子、老子、孟子、莊子などの儒者が人倫の道を深く教えて下さいましたが、環境保護に関しては何



の教育もしてこなかったのではないかと考えています。中国の歴代の人たちは環境とは無限と考えていたように思います。現代でも中国の環境汚染は深刻で

北京では呼吸も困難な状況が生じています。それらを受け、急速に環境保全をしていかなければならないという流れにはなってきていると思いますので、政治的に大きな転換があると思っています。しかし、中国人の食生活に対する欲求は凄まじく、あらゆるものを加工して食べようとし、そのためにお金も惜しまない性質があります。私は北京の林業局に3回ほど陳情に行きましたが、担当者たちは一様に保全の方向で進めたい旨の話をしています。補足はシンバ・チャンさんをお願いできればと思います。

川路：いずれ、これに類似した話も出てくるとと思いますので、チャンさんにはその時にお話ししてもらいましょう。それでは、ご講演いただいた方たちとディスカッションを進めます。玉田さんのお話でも触れられましたが、シマアオジという種の保全を進めていますが、「種の保存法」が変えていくべきところなのかも知れません。「種の保存法」とは「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保全に関する法律」という平成5年に制定された法律です。レッドリストに挙げられている種の中で、特に生息環境が悪化しているある種を特定して重点的に保全を行う法律です。実際に「種の保存法」の国内希少野生動植物種に含まれると「保護増殖事業計画」をたてることができ、これに含まれると予算がついて計画が進められるものです。

皆さんも現在、シマアオジやアカモズが減少しているのを注目していると思います。ただレッドリストには含まれていますが、「種の保存法」の国内希少野生動植物種には含まれていないのが問題です。今回お話しいただいたタンチョウやシマフクロウは実際にこの「保護増殖事業計画」が進められています。そこで、正富さんと早矢仕さんに現在進められている「保護増殖事業計画」のお話をお聞きしたいと思います。この「保護増殖事業計画」に入った方がいいのか、またはデメリットなどもありましたらお話しいただけませんかでしょうか。

正富：タンチョウはかなり前から保護増殖事業計画が進められて、実際に色々なことが行われてきています。しかし最近になって問題が出てきています。保

護増殖事業計画の会議を主催して開くのは行政の役目になります。主催するのが行政なので行政側の考え方がそこに入り込んできますので、つまり主導権を行政が持ち、行政側のやりやすいように進めていくような方向が少しずつ出始めています。

ニュースにもなりましたが、タンチョウの給餌を減らして、分散させようとしています。分散をさせるのは大賛成ですが、そのやり方が行政の計画になってしまっています。単純な発想で餌を減らせば分散されるという進め方になりそうな雰囲気になっています。我



々は餌を減らしさえすれば分散されるということは言ったことはありません。最終的には分散されることは必要ですが、そのためには分散される先の受け皿の体制を整えなければなりません。餌を減らせばタンチョウはどこへ行くでしょう？タンチョウは農家へ餌をとりに行ってしまう。そうすると農家への食害や家畜への影響が懸念されます。会議ではこのような話題になることがありますが、行政側にある程度の見識のある人がいなければなりません。具体的な名称をあげて申し訳ありませんが、環境省では現場や中間の担当者は2~3年、場合によっては1年経たずに変わってしまいます。そうすると新たな担当者は事情が分からずに行政が立案したことを推進しようとしてしまい、現実離れした話になってしまいます。これが保護増殖事業計画の問題点ではないでしょうか。地元の人たちの意見が反映されなければ行政側が主導権を持って計画通りに進められてしまうという危険性があります。

私が先ほどのお話から強く訴えたいのは地域住民の方々が会議の中に入ってこなければなりません。現在、保護増殖会議（委員会）の中に地域住民の方は入っていません。あくまで傍聴者という立場です。これを解消していかなければ将来的に問題を起こすのではないかと私は考えます。

早矢仕：正富先生のおっしゃるとおりで言い尽くされたと思います。

川路：今後シマアオジが種の保存法に指定される時には十分考えなければならぬ問題です。「種の保存法」にただ指定されればいい、または「保護増殖事業計画」を立てればいいというだけではありません。今現在の「種の保存法」に指定されている「特定野生動植物種」はある程度「保護増殖事業計画」がイメージされるような種です。ひとつの増殖計画の中で増殖するという手法が必要になってきます。増殖するというのはいったん引き取って、生息域ではないところで増やそうという計画も必要になります。それを「生息域外保全」といいます。ある生息域から一定の個体数を取り、それを増殖する手法です。まずは増殖する方法論が問題になります。

テレビなどで話題になっていますが、ニホンライチョウが少なくなっています。ひとつはアルプスなどの生息域で保全活動が行われています。数日前の「ダーウィンがきた」でも「ボディガード作戦」ということで生息域の中でしっかりと増やすことを考えているということでした。もうひとつは生息域から卵をとって、後にそれを戻す計画をしていますが、動物園でヒナを育てようとしてなかなかうまくいかないようです。そこでそれをどうするかという会議も最近開かれたようです。

そのようなことも含めて、シマアオジで生息域外保全が可能かどうか、玉田さんはどうお考えでしょうか？

玉田：9月にあった鳥学会で少しこの議論は出ました。3つのステージがありますが、それが重要になるでしょう。まず、飼育技術をしっかりと確立するステージ。さらにそこから繁殖のステージに持っていく。そして繁殖から次のステージとして、野外に放して渡りをするところまで持っていかねばなりません。今日は紹介しませんでした。シマアオジはかなり特殊な渡りをしますので、ただ放せばいいという問題ではありません。現状は小鳥を飼育している動

物園が少なく、北海道の中でも旭山動物園くらいです。昔の日本には飼い鳥の技術がありましたが、それは伝承されていけませんので、まず飼育技術や繁殖技術もありません。さらに動物園の人たちが放鳥するという技術や考えも少ないと思います。ですから、生息域外保全についてはとても今すぐどうにかできる状況ではありません。

川路：一番最初の玉田さんの「講演の前に」のお話では北海道にシマアオジがほとんどいなくなってしまったということでした。そうすると生息域外保全をするための個体数を確保することがまず難しくなったことになります。タンチョウやシマフクロウのお話が出ましたが、シマアオジは「スズメ目」でさらに「渡り鳥」であるというのは非常に大きな問題に思います。

ひとつの例として「スズメ目」の鳥で、インドネシア・バリ島の固有種でカンムリシロムクという鳥がいます。この鳥は白がとてもきれいな鳥です。この白の美しさからか、乱獲され、情報では三十数羽までに減ってしまいました。しかし、1960年代から飼育を続けてきて、世界の動物園が協力してきたので世界中の動物園に約千羽います。本来の生息域には三十数羽しかいませんが、世界中に千羽もいることになります。この千羽を元の生息域に戻そうとしますが、それがなかなかうまくいかないようです。玉田さんがおっしゃった3つのステージのように、かなり長期的なビジョンを持って保全計画を進めていかなくてはならないでしょう。

まずは、「種の保存法」の「国内希少野生動植物種」に指定した方がいいという話がありましたが、先日話題になりました「日中渡り鳥保護条約」などを絡めてシンバ・チャンさんの方で何かありますか？

シンバ・チャン：日中の渡り鳥等保護協定会議で日本の環境省はシマアオジのことについて発言しましたが、その時の対策案は出ませんでした。この問題は重要です。未だ北海道での保全計画もさることながら皆さんのアイディアもない状況です。私は中国鳥類学会にも参加して、中国や海外の研究者らからの情

報も得ましたが、これまでのシマアオジの渡りの経路などの詳しい情報はあり
ません。だいたいはユーラシアの北の方が繁殖地、東南アジアの大陸とインド
の北の方のヒマラヤなど越冬地
は4地域あります。これらの亜
種がどのように渡りをして越冬
するかなどは分かっていません。
今ドイツの研究者によって標本
などからDNAをチェックしてお
り、シマアオジがどこで繁殖し
て、南側のどこで越冬するか、また個体群で何か問題があるかなどの調査研究
がはじまっています。



もうひとつ、ロシアの方からの重要な提案がありました。北海道のシマアオ
ジは、大陸の亜種とは違うので、例え大陸産のものを人工繁殖で飼育できても、
それは渡りの経路も違う別の亜種です。北海道のシマアオジに一番似ているの
はサハリンのシマアオジだと言われており、日本（北海道）とサハリンとの共
同調査を行って保全していくことが重要だと思います。

とにかく、今一番減っている原因は中国の乱獲です。中国には法律もありま
すが、実行体制には問題があります。しかし、私は中国の環境教育を推し進め
ることと法律の実行体制を強化していくことが大事であると考えています。私
たちは中国の林業部と話し合い計画を進めるべく検討を行っています。

現在の中国は世界で一番、野生動物を食べる国になっています。しかし、最
近では一般的な人も野生動物に関心を示しており、特に1980年代以降に生まれ
た若い世代は、野生動物の保全への取組みもみられます。中国全体でも野鳥の
会のような組織が40以上あり、野鳥の会のメンバーも大学生をはじめ若い人が
多いので、環境教育などと連携していければいいと期待をしています。

川路：ありがとうございました。先ほど遠藤さんが中国人の性質や人となりのお話をシンバ・チャンさんにお聞きしたいとおっしゃっていましたが、今まさ

にそのようなお話でした。中国では世代によって考え方が変わっているようで、期待が持てるという貴重なお話でした。

先ほど「日中渡り鳥等保護協定会議」のお話をしました。渡り鳥たちには国境はありませんので、色々な国間を行き来します。国の間を行き来する鳥たちの保全について政府間で話し合いの場を持つという会議です。このような二国間の協議が定期的に2年ごとに行われています。シンバ・チャンさんのお話では今までシマアオジの話は触れられてきませんでした。今年の会議で食習慣の部分などで日本側から問題提起されたようです。こちらにも出していますが、インターネットなどでも議事録が出ています。要するに日本政府が働きかけを中国政府にして、中国政府は取締りを強化するという約束になったようです。このように期待が持てるのかも知れませんが、これだけ数が減ってしまっただけ回復するのは難しい問題です。シンバ・チャンさんからも提起されましたように北海道でかなりの数が減ってしまっているのに、他の地域で捕獲した個体を北海道で放鳥してもいいものか、そのシマアオジが北海道に戻ってくるのかどうか、という難しい問題もあります。

はい、どうぞ。

遠藤：中国のマスコミも環境保護や野生生物保護には非常に高い関心を持っています。記者の中にはレベルの高い人たちも沢山いて、人民日報以外の様々な新聞にたびたび中国人の習性を直していかなければならないという記事や密猟に関する記事も非常に多く出ています。ですから中国のマスコミとタイアップが可能であれば大きな力になると思います。

中国人はカエルを食べるのを非常に好みます。4~5年前ですが、路上などでもカエルのピリ辛炒めのものを酒の肴とする風習があるらしく売られていました。私が上海のある市場でカエルを売っている写真を撮ろうとすると非常に嫌がり、すごい剣幕で隠そうとして拒んでいました。今では売ることも禁止になっているからですが、禁止の流れは全体に広まっていますので、可能性は十分あると思います。

私は、数年前にシンバ・チャンさんと香港の WWF で出会いました。その時に責任者は女性の方でした。3名の女性の方は優雅に私にお茶を進めてくれました。その時に私は香港からの鳥の輸入を何とかしてほしい旨の発言をしました。するとそれまで優雅にお茶を飲んでいた女性たちが「それは日本の方で対応すべきだ」と、すごい剣幕で言われました。「私たちは WWF で頑張っているのに、日本が輸入で規制しないためにこんな状態が続いている」と強調して言われ、私は「申し訳ない！」と謝りました（笑）。私はお互いの意見があると思うので、交流はどんどんしていくべきだと思います。

川路：ありがとうございます。

玉田：しゃべり出すと切りがないのですが…、日中渡り鳥協定にはポイントになりそうなのが2点あります。ひとつが中国で規制強化を中国側でも行うということ言われています。もうひとつは日中間で統一したモニタリングを呼びかけられていて、専門家による意見交換の場を設置しようということが議事に出てきています。ですから中国で食べられているからといって、中国を悪者にするだけはいけません。中国政府もメスを入れたいと思っているので、この動きを後押しするべきです。



もう一点。先ほどシンバ・チャンさんが紹介した論文がありました。これはドイツの学者が書いたものです。この論文の共著者としてロシアの学者たちやヨーロッパの方たちも名を連ねています。シンバさんだけが日本の所属です。このヨーロッパとロシアの論文をどこに出したかというアメリカの雑誌です。ヨーロッパの学者がアメリカの雑誌に投稿したということは国際的に認知され始めてきていることになるのではないのでしょうか。中国政府も感じているでし

ようし、日本の北海道も遅れずに声を上げる時期に来ているのではないかと思います。

川路：ありがとうございます。整理をさせていただきます。シマアオジを保全することに関していくつかレベルがあります。ひとつは政府レベルで行うこと、もうひとつは保護団体レベルで行うこと、民間レベルで行うことなどいくつかのレベルがあります。今話題になっているのは政府レベルで行うことです。種の保存法の指定というものがありますが、指定については非常に新しいタイプの要するに渡り鳥・夏鳥であるということに関しては今まで例が多くはありませんでした。新しい保全策をまず政府レベルで考えなくてはなりません。先ほど少し出ましたが、アジアで共通のモニタリング体制構築が必要でしょう。減っていることを直感で話してもどうしようもありません。グローバルに同じモニタリングを行い、しっかりとした科学的根拠が必要になります。このモニタリング体制の構築も政府間で行っていかなくてはならないでしょう。もうひとつは外交交渉で中国政府に強い働きかけを行わなくてはなりません。それから最後は生息域外保全を実施して、何らかの形で増殖させる方法論を立てなければなりません。ただ現在は方法論の序の口にも到達していないレベルですが。民間レベル、保護団体レベルでできることはなんでしょうか。ここで意見交換を進めていきたいと思っています。アイデアやご意見などお持ちの方がいらっしやいましたらお願いします。

梅木：今のお話にあった保護増殖云々の前に、しきりに問題となっている中国との協調などが言われている訳ですが、やはりまず国に動いてもらうことが必要だと思います。種の保存法の指定を受けることによって、方法論や内容は非常に課題の多い鳥ですから、川路さんのおっしゃるとおり、具体的なものが確立されていぬ現実がありますが、国にしっかり動いてもらうには種の保存法に指定して、タンチョウやシマフクロウのように増やしていくという手順を踏んでもらう必要があるのではないかと思います。

それから先ほどから川路さんが言われてますように、シマアオジはスズメ目でタンチョウやシマフクロウと性質が違う訳です。ご承知の通り渡り鳥は生まれたところに戻るといった性質を持っている訳ですから非常に困難なわけです。種鳥を確保するにしても北海道の亜種が少ないというのであれば、増殖上ではロシアとの協力が必要になってくるのではないのでしょうか。サハリンから単純に持ってきてもまたサハリンに戻ってしまうかも知れませんが、難しい点があると思います。例えばサロベツなどで大きなケージで繁殖させるような効率のよい技術はないのでしょうか。

川路：そういったところではやはり政府に動いてほしいということになります。民間レベルや保護団体ではありますでしょうかね。

大館：紋別の大館です。今回のお話を聞いて、3年くらい前に玉田さんと一緒に酒席を思い出しました。まず、北海道のシマアオジはどのくらいいるのだろう？それを知らなければ何もできないのではないのでしょうか。シマアオジの情報というのはなかなか出てきません。写真家の横の情報はネット上では飛び交いますが、一般の人たちは今どこにどれだけの個体数があるか分かっていません。私は今年久しぶりにサロベツでラインセンサスを行い、3羽ほど確認しました。このように今確実にいるところの情報をしっかりと押さえておかなければ、これから先出来ることはかなり少なくなるのではないのでしょうか。また、いなくなってしまった場所でも何年にどれくらいいて、いついなくなってしまったかという情報も収集しておくことが大切であると思います。地域にはこういった情報を持っている人たちが必ずいるはずですので、それを掘り起こすのが行政の仕事で、行政に協力するのが民間の仕事であると思います。

川路：まずは現状把握が大切ということですね。シマアオジの保全のために道内で情報を発信する作業が必要ですね。ただし、シマアオジに関して減少しているのは日本のせいではないというのが明らかになっていますので、相手方に

対してどういった対応をしていくかも重要ではないでしょうか。現在は情報化社会になってきているので、そういったものを利用できるのではないかと。また、北海道のシマアオジの情報もウェブ上に出せば、中国の若者たちにもネットは広まっていますので、そういった情報発信の手段もあるのではないのでしょうか。

現在、中国人が訪れ、爆買いなどで迷惑している人たちが非常にたくさんいます。しかしこの人たちにシマアオジという鳥の中国での現状を伝えるだけでも、感じ入ってくれる中国人もいるのではないのでしょうか？こういったインターネットを使った方法や、たくさん来日している中国人に伝える方法などもあるのではないかと考えます。

遠くからお出での葉山さんどうぞ。

葉山：野鳥の会（東京）の葉山と申します。先ほどシンバさんのお話の中でサハリンと北海道のシマアオジは同じ亜種だとおっしゃっていました。まだバードライフなどのサイトを見てもそういった情報はアップされていません。カムチャッカは違いますが、アムール川流域は同じだという情報もあります。北海道にいる同じ亜種を保全の対象にしていかななくてはならないのではないのでしょうか。ロシアにも NGO のカウンターパートがいると思いますが、そういうところと日本と同じ亜種がどこにいるかを調査していくといいのではないのでしょうか。また過去の標本を調べればわかると思うので、それらを保全して中国の状況が良くなった時に中国で増えてまた日本に戻ってくるというのが理想だと考えます。

川路：葉山さんや大館さんのお話でも、きちんとした現状把握を科学的に検証し、それを基に保全計画を立てるということは非常によく理解できます。

本日、事情があり時間が無くなってまいりましたので、まとめていきます。私が先ほど政府間レベルで進めていかなければならないと言いましたが、それはなかなか難しいようです。また民間レベルでも私がいくつかの提案をだしましたが、それが現実化するかはわかりません。しかし、この集会、シンポジュ

ウムを通じて日本の中でシマアオジにもっとも関心を示しているのは北海道民しかいないと思います。シマアオジは北海道にしか生息しないから道外の人たちは感じづらいのですが、北海道の人たちが意識を持って進めていかなければならないのではないのでしょうか。まさに風前の灯であるシマアオジに対して道民がどういった意識を持つか。身近な人たちだけではなく、こういった集会をどんどん増やしていき、進めていくのが非常に重要になってくると思います。政府間レベルでは今後はしっかりと進めてくれるはずですし、中国の国民の意識も変わっていくでしょう。しかしそれまで待てるかということもありますが、皆さん是非早めにこういった活動を広めていただければ幸いです。最後に玉田さんをお願いしましょう。

玉田：2020年に何があるかご存知ですよ。東京オリンピックです。オリンピック以外に重要なものがあります。2010年にCOP10が名古屋で開催されたのは皆さんご存知のとおりだと思います。この中で愛知目標、別名ポスト2010年目標といいます。2010年までに生物多様性の損失を食い止めると言っていましたが、それが出来なくなったので、改めて目標を作った訳です。この愛知目標の中では2020年までに生物多様性の損失を防ぐために実効的かつ緊急に行動を起こすことが確認されました。20の目標があって、具体的な12の目標の中で「既知の絶滅危惧種の絶滅及び減少が防止され、また特に減少している種に対する保全状況の維持や改善されることが達成されること」を目標として掲げている訳です。ただしこの先5年の猶予しかない状況で放っておけばシマアオジは絶滅してしまうかもしれません。皆さんがオリンピックに沸いている時にポスト2020年目標というのを立てなければならぬ時に来ているのかも知れませんが、以上です。

川路：ありがとうございました。最後は政府に対しての注文みたいなお話になりました。

短い時間でしたが、実のある深いお話が出来たのではないのでしょうか。パネリストの皆さんありがとうございました。ご来場の皆さん、ありがとうございました。

松山：皆様、本日は1時から延々5時間近くもの長い時間お疲れ様でした。外は寒いですので、気をつけてお帰り下さい。なお、この後の18時からは、いつも例会を行っている鳥次郎にて懇親会も催されますので、ご参加の方はそちらへ是非お越しください。

最後のお願いですが、今回は（公財）北海道新聞野生生物基金の助成のお陰でこういった立派な行事が出来ました。入り口に募金箱がございますので、お志のある方はぜひお願いいたします。本日は本当にありがとうございました。

（おわり）

資 料

開催資料
案内チラシ
新聞記事

野鳥お勉強会特別企画講演会

北海道の希少鳥類を考える集い

—夏鳥を減らさないために—



2015年11月28日（土）13時～17時30分

札幌学院大学社会連携センター（札幌市中央区大通西6丁目（南大通り））

主催：野鳥お勉強会

協賛：北海道新聞野生生物基金、（株）野生生物総合研究所

協力：エコ・ネットワーク、北海道野鳥愛護会

□ プログラム

受付 12:30～13:00

<総合司会> 松山 潤

開会 13:00～13:20

開会の挨拶 富川 徹 (野鳥お勉強会代表)

特別講演の前に 「希少鳥類の最近の状況」

玉田 克巳 氏 (北海道立総合研究機構主査)

[第1部] 特別講演 13:20～15:20

1. シマアオジの受難

遠藤 公男 氏 (動物文学者)

2. 道央からアカショウビンが消えた

嶋田 忠 氏 (鳥類写真家)

(休憩)

[第2部] 講演&パネルディスカッション 15:30～17:30

<コーディネーター> 川路 則友 氏 (元森林総合研究所北海道支所長)

1. タンチョウの群れを保つための情報

-群れの状態を捉えるため、どのように調査を行ってきたか-

正富 宏之 氏 (専修大学北海道短期大学名誉教授)

2. シマフクロウのこと

早矢仕 有子 氏 (札幌大学教授)

3. 沈黙の春、再来? 夏鳥の減少

玉田 克巳 氏 (北海道立総合研究機構主査)

閉会 17:30

懇親会 18:00～20:00

(※ 会場は10ページを参照)

□ 講演要旨

シマアオジの受難 動物文学者 遠藤 公男

●**シマアオジ** ホオジロの仲間の夏鳥で、北海道の石狩川や道東の草原に普通だったが激減した。筆者は1990年から中国の野鳥の輸出(メジロなどの飼い鳥)調査に中国各地を訪ね、三水のシマアオジの乱獲を聞き、2000年現地に入ると1998年から禁止になっていた。筆者は店の取材だけで捕獲地の調査はできなかった。改めて調査したいものだ。以下、調査のメモである。

●**三水市** 中国広東平野の珠江デルタにある。ここではロシアや中国東北部で繁殖し、10月の霜の降りるころ(稲刈りの時期)に大群で南下する小鳥(中国名・禾花雀)を捕獲する。暗くなると農民が小鳥のねぐらのヨシ原に袋網を張り、追い込んで数千羽の小鳥を捕え、生きたまま売る。

●**空のニンジン** 獲物はシマアオジが主で、シマノジロ、ミヤマホオジロが混じる。1990年代初めに三水市の雀友会が「小鳥のグルメ祭り」を開き、シマアオジを「空のニンジン」と名づけて売り出すと、美味が評判になり、30日ほどのシーズンに10万人が食べに集まるようになった。

●**禁止** 市内を流れる川の北岸の堤防沿いの200軒ほどの露天に屋台を並べ、さまざまな小鳥料理で酒を飲ませた。1人が10羽ずつ食べれば100万羽が消え、冷凍で売られるものも入れると莫大な数になる。中央の指導があつて地元政府の林業庁が禁止した。

●**レストラン** 露店の営業はなくなったが大通りにはレストランが並んでいる。ここで女主人に聞くと、「時期になれば食べられる。さまざまあるが、生きたまま粘土で包んで蒸し焼きにし、タレをかけるのが絶品」と笑った。

●**中国政府** 1999年12月から環境保護を理由に全国に野鳥の捕獲、販売、輸出を禁じたが、取り締まらない所が多い。2012年には上海の花鳥市場でたくさんのかごの野鳥を公然と売っていた。

●**三水までの足** 広州空港からバスかタクシーで東方賓館(ドンバオピンカン・広州市でNo2のホテル)に宿をとり、フロントに日本語の通訳を頼んで契約する。広州から三水市まで高速道を車で1~2時間。三水で通訳に「禾花雀」を捕る農民をタクシードライバーに探させる。大抵見つかる。

参考文献

樋口広芳「日本の鳥の世界」平凡社 禾花雀の乱獲は天津、南海、恩平にもある。

遠藤公男「野鳥売買 メジロたちの悲劇」講談社

遠藤公男「かごの野鳥の解放をめざして」野鳥NO.661 2003

道央からアカショウビンの姿が消えた

鳥類写真家 嶋田 忠

千歳の森からアカショウビンの姿が消えて15年以上、
時を同じくして白老、苫小牧、札幌でも見かけなくなった。
アカショウビンはどこへ、その原因を考える。

タンチョウの群れを保つための情報

—群れの状態を捉えるため、どのように調査を行ってきたか—

専修大学北海道短期大学名誉教授 正富 宏之

かつて、北海道にはタンチョウがたくさんいた。しかし、生息地の湿原が干拓されたり、ヒトが食べるために獲ったりして、19世紀末までに激減し、まさに絶滅一步手前となった。が、20世紀半ばからの給餌の効果で羽数は劇的に回復し、ひとまず緊急事態は避けられている。

現在の群れの状態をざっと眺めると、まず羽数は1,500羽を超え、絶滅の危険は前より減ったが、将来にわたり群れをしっかりと保つに十分な数とは言えない。夏は釧路湿原を中心に暮らすのが、十勝、根室、網走の各地方での繁殖も順次確認され、さらに宗谷や日高など道東以外へも分布は広がっている。冬は群れの9割強が釧路管内で過ごすのが、このところ十勝で冬を越すツルが増えている。繁殖地は主にヨシの生えた湿地だが、ハンノキの林内とか、農家・農耕地・道路等の人工物近くでの営巣も多くなってきた。しかし、群れの生産力は(出生) - (死亡) = (プラスの状態)で、羽数は給餌成功後ずっと右肩上がりの傾向を示す。その結果、住める場は限られるので過密化が起き、冬は特定の給餌場へ過剰に集まり、感染症の発生なども心配されている。しかし、最近では小群で広く散らばって冬を過ごすツルも多くなってきた。

こうした状況を捉えることで、この群れが将来どうなるかが推測でき、それを基にいかなる対策をとればよいかを検討できる。

では、こうした状況を把握するために、これまでタンチョウでどのような調査を行ってきたのか。

1. まず、羽数をなるべく正確に毎年数えること。これは、群れの実態と状態の良し悪しを判断する、最も基本的な調査である。1952年からの北海道による一斉調査はそれに応えられる方法でないため、1985年から別に新たなセンサスを開始した。

2. しかし、羽数だけ数えていても、なぜ増えたか？なぜ減ったか？には答えられない。そこで、群れ全体の状況を広く捉えられる航空調査を、1982年の繁殖期から継続することにした。これにより、分布とその広がり方、繁殖地の環境の多様さとその変遷、営巣密度(込み合い)とその変化、環境収容力(どれだけのツルがそこに住めるか)の変化とその限界、飛行調査とセンサス結果を組み合わせた繁殖率などなど、群れの内情とその将来を予測する基になるデータが得られてきた。

3. また、個体識別できるツルを群れのなかにつくり(標識付け・バンディング)、その齢を数えて、寿命とそれに関連した繁殖年齢、死亡率(=生存率)とその変化、あるいは移動・分散などの確かな情報が得られるようになった。

4. さらに、バンディングの際にごくわずかな血液を採り、遺伝的な情報を得ることで、潜在的な群れの性格（多様性の欠如）などが知られ、このこともツルの保全方法を考える際の重要な要素となった。

タンチョウは留鳥ゆえに繁殖地と越冬地の両方の生活を調べることができ、夏鳥のシマアオジのように、越冬期の状況解明と保全は相手まかせとは事情が異なる。それゆえ、保全策を立てる際にも統合的な検討が可能で、ある意味で対応しやすい。

しかし、タンチョウの群れを保つのに関わるいくつかの謎がまだ残されており（たとえば死因として天敵がどのていど働いているかなど）、その多くは未解決のままである。そのうえ、温暖化という地球規模の変動とか、北海道の農業経営形態の変化や農業人口減少による農地放棄といった社会問題も、タンチョウの生息環境保全と維持に大きな影響を与えると予想されるが、それらの影響解析にはほとんど手が付けられていない。

結局、生物保全に知識と見識を持った行政官、地道に調査を重ねその結果を解析できる研究者、生き物との共存に関心と協力を惜しまない地域住民、この三者の総合力がこれからの希少種保全に強く望まれる。

シマフクロウのこと

札幌大学地域共創学群 早矢仕 有子

シマアオジのような草原性の夏鳥と、留鳥で森林性のシマフクロウでは、減少の過程も必要な保護策もまったく異なります。両者に共通しているのは、どちらも名前が「シマ（蝦夷が島）」で始まることと、近い将来の絶滅危険性が高い「絶滅危惧 I A類」に選定されていることくらいでしょうか。

種名が示すとおり、どちらも日本国内での生息地は北海道に限られます。ですから、彼らを絶滅させないためには私たち北海道民の頑張りが必要です。

シマフクロウの減少要因は、多くの絶滅危惧種同様、生息環境の消失です。すなわち、主食の魚類が住む河川環境の悪化と、巣を営む広葉樹の大径木を有する成熟した森林が失われたことで、シマフクロウは絶滅の危機に追いつめられました。1984年から継続している国の保護増殖事業により、個体数は140羽まで漸増していますが、まだまだ予断は許されません。

将来を楽観できない大きな理由のひとつは、シマフクロウの生存と繁殖が人為給餌と巣箱に依存し続けており、生息環境自体が改善してはいないことです。保護が開始された当初はともかく、30年以上経過して事態が好転していないのは関係者として恥ずかしい限りです。

また、最近頭を痛めつつ、一方で好機の可能性も感じるのは、シマフクロウを見に（写真を撮りに）多数の人が出かけていることです。個体に悪影響を与えないよう厳格なルール作りが急務なのですが、同時に人々の関心の高さを保護への推進力に活用する賢明な保護策が求められています。

沈黙の春、再来？ 夏鳥の減少

北海道立総合研究機構主査 玉田 克巳

「沈黙の春」とは1962年に刊行されたレイチェル・カーソンの名著 “Silent Spring” の邦題である。たくさんの農薬が使われた結果、鳥たちのさえずりが消えた。化学物資の脅威を訴え、社会的にも大きな反響があった作品である。これ以後、化学物資の使用は厳しく規制され、環境は徐々に改善され、鳥たちのさえずりも戻ってくる。しかし1990年の中ごろから再び、各地で夏鳥たちが姿を消しはじめる。化学物資によるものではないと思われるが、ヨーロッパ、アメリカ、そして日本でも、小鳥たちが、ひっそりと姿を消している。1999年には、イギリスの科学雑誌 Nature に “The second Silent Spring?” と題する論文が掲載された。「沈黙の春 再来？」という訳になるだろうか。

シマアオジ。かつては道内各地に普通に生息していた鳥である。私は1980年代の後半に帯広の大学で学生生活を謳歌していた。大学農場の横にあったあずま屋で成吉思汗をつつきながら酒を酌み交わす。大学のF先生から「成吉思汗とは、北海道開拓使のころに……」という講釈を聞き……、そしてその脇でシマアオジが、ノゴマやオオジュリンと同じようにさえずっていたのである。

1990年代中頃、私は根室支庁で働いていた。根室はバードウォッチングのメッカのような場所で、私の周りには大勢の鳥仲間がいた。そしてこのころ、各地でシマアオジが姿を消しはじめる。仲間内でもこのことが話題になり、友人のKさんたちが春国岱の実態調査を開始して、科学論文としてまとめる。これが国内でシマアオジの減少を明らかにした最初の論文である。私は当時、自然保護行政に携わっていたものの、原因さえはっきりしないシマアオジの減少については、打つ手がなかった。いつか、この問題を真正面から取り組みたいと決意を固めたのはこの時期である。

2000年、私は道の研究機関で、エゾシカの研究を進める部署にいた。このときにA部長から「部として夏鳥の減少問題に取り組むべきだと思うが……」と相談を受けた。私のシマアオジ研究はここからはじまる。すでに各地で消滅していた時期である。この辺からスタートした夏鳥の減少についての研究。本講演ではこのころからの成果をご披露したい。

□ 講演者・コーディネーターの紹介（敬称略）

遠藤 公男（えんどう きみお）

岩手県出身。小学校教師をしながらコウモリの3新種を発見。野鳥の密猟、飼い鳥問題をライフワークに。主著「原生林のコウモリ」「韓国の虎はなぜ消えたか」「野鳥売買 メジロたちの悲劇」など。元日本野鳥の会宮古支部長。



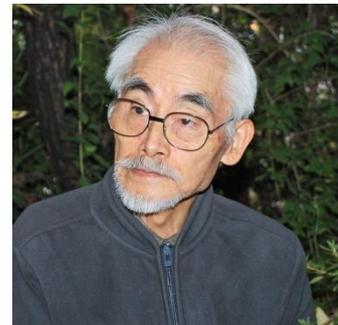
嶋田 忠（しまだ ただし）

埼玉県出身。日本大学農獣医学部卒業後、動物雑誌「アニマ」（平凡社）創刊に参加。以後、野鳥を中心に独自の世界を開拓する。千歳市在住。2014年千歳市蘭越に常設展示のギャラリーを開館。作品集に「カワセミ 清流に翔ぶ」「火の鳥 アカショウビン」など。アメリカ国際フィルムビデオフェスティバル自然部門最優秀賞など受賞。



正富 宏之（まさとみ ひろゆき）

北海道出身。理学博士。ヒグマの研究にも手を染めたが、釧路市立郷土博物館長や美唄市の専大北海道短大教授を勤め、1968年から本格的にタンチョウの研究に取り組む。その合間に高山の鳥や沼の水鳥の調査、野幌でのシマアオジの行動研究なども手掛け、2003年に停年退職。主著「タンチョウそのすべて」など。北海道文化賞など受賞。



早矢仕 有子（はやし ゆうこ）

大阪府出身。博士（農学）。北海道大学大学院農学研究科博士後期課程修了。2002年から札幌大学に勤務し、現在は地域共創学群教授。農学部在学時に、道東でシマフクロウに一目惚れの体験をした後、縁あって大学院の研究テーマとしてシマフクロウの生態研究に取り組み、既に四半世紀が過ぎ去ってしまった。日本鳥学会副会長。



玉田 克巳（たまだ かつみ）

静岡県出身。帯広畜産大学で卒業論文としてクマガラ、修士論文としてカラスの研究に従事。北海道中標津高校の事務職員、根室支庁林務課を経て、1997年から北海道環境科学研究センター（道東地区野生生物室）に就く。2003年に同センター（札幌）に異動。2010年、机も仕事も変わっていないが、組織改正に伴って現職に改名。



川路 則友（かわじ のりとも）

鹿児島県出身。九州大学大学院修了。農学博士。これまで鹿児島、つくば、盛岡、札幌と渡り歩き、おもにアカヒゲ、ルリカケス、ヤブサメ、ヤマドリなど森林性鳥類の個生態を調べてきたが、どれも満足するまで至っていない。2013年に森林総合研究所を定年退職。いまは、センダイムシクイとツツドリとの微妙な関係に興味が移っている。バンディング歴は40年近く。現在、日本鳥類標識協会会長。



□ 懇親会（会費制） 18:00～20:00

懇親会会場「鳥次郎」は、この講演会会場から東へ60メートルほど進んだ昭和ビルの地下にあり、歩いておよそ5分です。

なお、本日は参加者多数のため、立食形式で行われることをご了承願います。

場所：「鳥次郎」札幌市中央区大通西5丁目昭和ビル地下街 011-241-9777

会費：一般3,500円（学生2,000円）



<http://www.mapion.co.jp/m2/43.062105147264724,141.35429882956052,15>



野鳥お勉強会

<http://www.toriben.org/>

tomikawa@toriben.org

野鳥お勉強会特別企画 講演会

『北海道の希少鳥類を考える集い ―夏鳥を減らさないために―』

北海道内に生息する希少鳥類、特にシマアオジやアカショウビンなどの夏鳥の減少の現状と課題について触れ、今後普通に見られる鳥たちが希少鳥類にならないために、私たちはどのように野鳥や自然と関わっていかねばならないかを考える。

この度は、古くからシマアオジなどの減少に関心を持ち、中国など各地を調べ歩かれた遠藤公男氏をはじめとする道内の野鳥研究者や動物写真家を講師にお招きし、道民と触れ合いながら意見交換を行う。

なお、本講演は、北海道新聞野生生物基金の助成を受けて開催します。

開催日時 平成 27 年 11 月 28 日（土曜日） 13:00～17:30

開催場所 札幌学院大学社会連携センター（札幌市中央区大通西 6 丁目（南大通））

プログラム

〔第 1 部〕 特別講演

『シマアオジの受難』 遠藤公男 氏（動物文学者）

『道央からアカショウビンが消えた』 嶋田忠 氏（鳥類写真家）

〔第 2 部〕 講演&パネルディスカッション

『タンチョウの群れを保つための情報―群れの状態を捉えるため、どのように調査を行ってきたか―』 正富宏之 氏（専修大学北海道短期大学名誉教授）

『シマフクロウのこと』 早矢仕有子 氏（札幌大学教授）

『沈黙の春、再来？ 夏鳥の減少』 玉田克巳 氏（北海道立総合研究機構研究職員）

講演会の申し込み・問合せ

定 員 : 80 名程度（※予定人数を越えた場合はお断りします）

参 加 : 無料

申し込み : 必須（名前、住所、連絡先など）

申 込 : メール : tomikawa@toriben.org（野鳥お勉強会代表 富川）

先 : 電 話 : 090-4874-1705（できるだけメールでお願いします）

申込期間 : 11 月 20 日締切り

懇親会

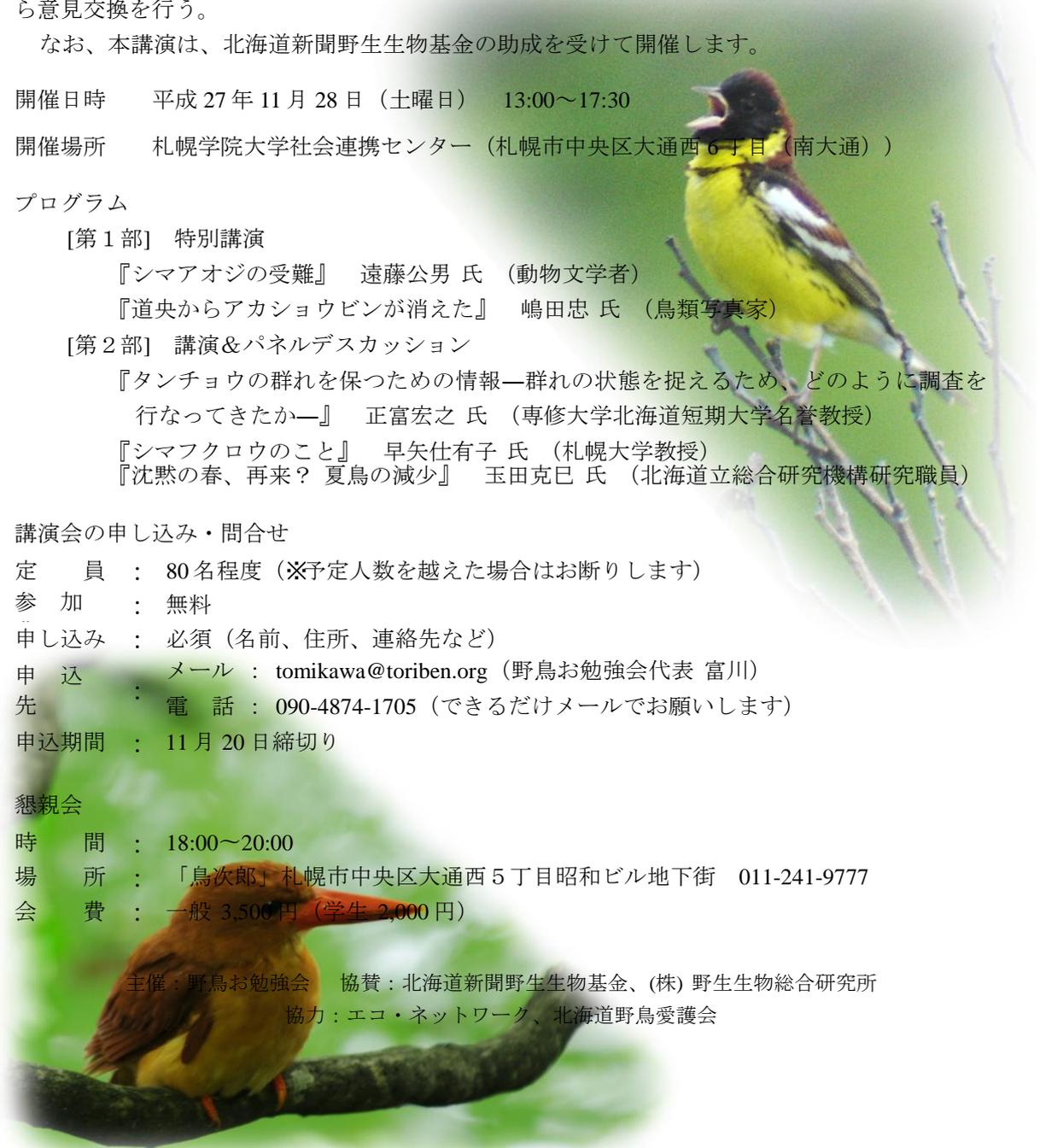
時 間 : 18:00～20:00

場 所 : 「鳥次郎」札幌市中央区大通西 5 丁目昭和ビル地下街 011-241-9777

会 費 : 一般 3,500 円（学生 2,000 円）

主催：野鳥お勉強会 協賛：北海道新聞野生生物基金、(株) 野生生物総合研究所

協力：エコ・ネットワーク、北海道野鳥愛護会



第3種郵便物認可

第3種郵便物認可

シマアオジの写真を見ながら希少鳥類の保全について考えた集い



希少鳥類の嘆きを受け止めて

生息激減シマアオジ

かつて夏の道内で普通に見られたのに、近年は生息数が激減しているシマアオジなどの希少鳥類について考える集いが28日、札幌市中央区の札幌学院大社会連携センターで開かれた。道内外の野鳥愛好家ら参加者約90人が、野鳥保護のあり方に思いをめぐらせた。

(関口裕士)

札幌 保護を考える集い

道内の野鳥愛好家らでつくる「野鳥お勉強会」の主催。シマアオジはホオシロ科の渡り鳥で体長約15センチ。繁殖期にオスが発する美しい鳴き声の特徴で「草原のフルート奏者」とも呼ばれる。1990年代以降、減少が顕著で現在は国の絶滅危惧種に指定されている。集いでは、シマアオジの現状に詳しいバードライフ・インターナショナル東京のシンバ・チャン主任研究員が「中国で食用に乱獲されたのが、シマアオジ減少の最大の要因とみられる」と指摘。2013年の世界全体の個体数は、1980年比で83〜94%減少したと推定されると報告した。同じ絶滅危惧種でもタンチョウやシマフクロウは法律に基づく保護増殖計画が立てられ個体数が回復した

が、シマアオジには計画がない。北海道立総合研究機構環境科学研究センターの玉田克巳主任は「どう保全するか作戦を立てる場もない。このままでは道内からまったくなくなってしまう」と危機感を訴えた。野鳥研究者や会場の参加者を交えたパネル討論では「道内の生息数の現状把握が大事」「長期的なビジョンを持った保全計画を」「まず道民に関心を持ってもらう必要がある」といった意見や提言が相次いだ。集いでは、岩手県在住の動物文学者遠藤公男さんや千歳市の鳥類写真家嶋田忠さんの講演も行われた。

151201 道新

道新野生物基金

(30日) ◆札幌市、野鳥お勉強会(青川徹代表)は中央区で開いた特別講演会「北海道の希少鳥類を考える集い」の会場が集まった募金90008円を北海道の野生物を守るために寄付した。札幌市厚別区、小川直樹さんは北海道の自然を守るために3千円を寄付した。